

STEP by STEP UP

さっかん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

New game小説、やってみました。

主人公は訳アリ姉妹です。

可愛がつてあげてください。

この姉妹、若干重いものを背負っています。

設定も現実的にあるかないかのラインを目指しています。

原作キャラの人間関係、過去を捏造しています。

時系列に若干矛盾あり。

他作品からのゲストもあり。

非ログインユーザーからも感想受け付けます。

目次

キャラクタープロフィール（随時更新）	1
「というわけで、今日から採用することになった九能ヒビキくんだ」	
4	
「…私は同情や共感で採用などしません」	13
「ええ、もちろん！　八神さんは憧れの目指すべき存在の人ですっ ！」	23
「ヒビキちゃん、ハードルを上げないでくださいっ!!」	42
「それはそれで間違いじゃないけどさ。　どちらかというお互いに思 うところがあるって感じだよ」	49
「大事にする、ね?…お姉、ちゃん」	57
「コミュ障も突っ切るとコミュ強になるんやな」	63
「ヒビツ、キッ、ちゃ…何でちよつとキレてっ…!んですかっ」	73
OG（オールド・ガール）01!	82
「そう言う言い方は卑怯ですよ」	92
OG（オールド・ガール）02!	100
「休日、は…ゆっくり、休みたいっ、です、からね?」	109
「いつ、意地悪な青葉ちゃんが出てきたんだっ、ヒビキちゃんっ、には 悪いけど逃げないっ…!!」	116

キャラクタープロフィール（随時更新）

名前：九能ヒビキ

誕生日 8月28日

身長 172cm

星座 乙女座

血液型 B

好物 カキフライ。栄養ドリンク。

苦手なもの お酒（飲めるけど苦手）、才ある人間に勝つこと。

特技 練習

出身地 奈良

（しかしワンエイズ、母はクォーター、父はハーフ）

人間関係

八神コウと幼いころから付き合い。

音楽講師とイラストレーターとの共働きで大体、両親は不在は多かった。そのため、5歳上の長男（清次郎）がヒビキと郷里の面倒を見ていた。

そんな中、兄が連れてきた人物が八神コウである。

八神コウ

ヒビキとかつての郷里が姉と慕う人物。

彼女の父と郷里、後の彼氏になる清次郎の影響で絵を描き始める。

ヒビキの父に明確に弟子入りを志願したわけでもなく、

彼も取ってはなない。

只、通じるものがお互いにあったのか、

コウは内心では師匠と思っている。

逆に彼も自分の作業を敢えて見せていた。

暗黙の師弟関係のようなもので、

コウ自身、弟子入りは否定している。

本人曰く「向こうはそう思っていない」とのこと。
只、九能父も同じことを思っている面倒くさい関係性が築かれている。

現在

七年前の事件を機に八神コウと疎遠になるが、

彼女を諦めきれずにイーグルジャンプに面接を受けて合格。

郷里の事情も伝え、姉妹共々合格。

彼女は正社員に郷里はバイト合格した。

個人的な決着もあるが、郷里の感情を取り戻すためでもある。

涼風青葉と望月紅葉たちの助けもありコウと和解。

かつての関係を取り戻した。

思想

かつて私立桜が丘女子高等学校に在籍していた。

そこでOGである放課後ティータイム、若葉ガールズの演奏に感銘を受ける。

自らの才に限界を感じつつ、今も技巧を極めるために様々なことに手を出す。

彼女自身、母親と唯たちとの差を痛感している。

それを補うようにライブに必要なパフォーマンス、トーク力などを磨く。

そのことに関しては不満はなく、自己決着をしたが…

純粹な楽曲のみで人を引き付ける彼女たちに痛みと辛さを伴う羨望を灯している。

妬みや嫉みがないのが救いである。

おそらく母親の教育の賜物である。

キャラ造形

New game! でまだ出てない役職は何か? というのを探し、音楽を選択し造形しました。

私自身、サウンドクリエイターがどんな作業か分からないので若

干、四苦八苦してます；

最近、音楽という設定に重みや厚みを持たせるためにけいおん！キャラとの関わりを持たせました。

これが吉と出るか、凶と出るか…

ちよつと反応が怖いですが、きらら関係なので相性は悪くないと思いたいです。

彼女は大抵の楽器をはじけ、パフォーマンズも一流なのですが音楽の才能は凡才です。

母やけいおん！キャラたちは才能というか天性のものがあるんです。

只、ヒビキはそれが無いというよりは開いてないという感じですよ。

エキストラの山田さんの声を聴いて作ったキャラなので、

ボーカロイドで例えるのなら母親は Sachiko でけいおん！

メンバーたちは初音ミク、

ヒビキは弱音ハクさんという感じですよ。

音楽以外の仕事に定評がある九能ヒビキですね。

只、その苦悩が彼女を邁進させる原動力にもなっています。

実際、好評で女性ファンも結構いるという感じですよ。

追伸：字数千文字超えないといけないので造形の経緯を書きましました。

「というわけで、今日から採用することになった九能ヒビキくんだ」

葉月しずくにとってはその日はサプライズの日だった。

それは仕事帰りのことだ。

いつもようになのかは知らないが、

彼女は行きつけのメイド喫茶に向かう途中、ある人物に声をかけられた。

凜としたよく通る声だ。

しずくの経験上、美女、美少女の声だと確信しメガネの縁をきらりと輝かせた。

彼女は確信にと灯らせ口元を三日月に彩る。

その声の方へと振り向く。

そこには予想通りの美女、いや美少女がいた。

「あの、いきなり声をかけてすいません。

イーグルジャンプのディレクターさんの葉月しずくさん、ですよね？」

「うむ、よく調べているね。

私とそのイーグルジャンプの美女敏腕ディレクター、

葉月しずくだよ？可愛いお嬢さん？」

雫は指先を顎に当ててドヤ顔を決めた。

声をかけた少女は若干、困惑した。

(声をかけていうのもなんだけど、

少し警戒したほうがいいんじゃないかな?)

少女はこのしずくの器量を測りかね、わずかに困惑した。

しかし、ここに来た目的のため口を開いた。

「あの、実は私ハ…」

「ああ。ちょっと待ってくれたまえ。

美少女である君を十分に目で堪能したい」

しずくの言葉にもうこの少女はどう返していいか分からなかった。

ふんふんとしずくは少女の容姿を見た。
カジュアルなビジュアルスーツに身を包んだ、緑の黒髪の少女だ。
長い髪も背中の真ん中で布でまとめている。
だがしずくは彼女の指に注目していた。

「あ、あのっ…」

「ふむ、君は音楽をやるのかな？」

「っ!？」

「ああ、いやすまない。

音響にも何人か君と似た感じの指をしていてね。

ギターでもやるのかな？爪の伸び方が特徴的なんだよね」

困ったように頬をかきながらしずくは言う。

その言葉に観念したため息をこぼした。

(しかし、この子の雰囲気…誰かに似てる気がする)

むむっとしずくは目を細めて少女を見る。

「あっ、あのっ…」

「おっとっ、何度も失礼をカマしてしまったようだね。

君の本題はなんなのかな？」

その言葉に少女は気を取り直してしずくを見つめた。

涼風青葉とも望月紅葉とも違う、真っ直ぐな目をしていた。

「私の名前は九能^{くのう}ヒビキ、

イーグルジャンプのHPをみて面接を申込みに来ました」

翌日。イーグルジャンプ会議室。

そこにはキャラデザ班、プログラム班の面々が椅子に座って、
複雑な表情でしずくの言葉を待っていた。

スーツを着た隣の少女は心もとなげに視線を彷徨わせていた。

身長がスラリと高く、黒いスーツとパンツとタイを着こなしている。

細身に見えるが胸部装甲は滝本ひふみ、望月紅葉に次ぐサイズを要している。

視線にさらされる居心地の悪さにヒビキは内心辟易としていた。心情的に転校生が注目される感じのものに近い。

「というわけで、今日から採用することになった九能ヒビキくんだ」「あ…、あの、ど、どモ」

しずくのいきなりの発言に社員は困惑した。ヒビキも困惑した。

彼女のには面接の約束を取り付けたつもりだったが、流利的に既に採用されてるような空気だったからだ。

阿波根うみこは頬をひくつかせた。

「何してくれてんですか。」

この忙しい時期に何やらかしてるんですか」

怒気というよりも覇気を放つうみこ、

そんな彼女に威圧され、しずくはヒビキの後ろに隠れながら怯える。

「あの、すいません。」

私のせいデ」

「いえ、大方うちのディレクターに引っ掻き回されたのでしょう？」

あなたは被害者です、すいません」

そういう頭を下げるうみこに恐縮して頭を下げるヒビキ。

「いえ、原因を突きつけたのは私なのデ」

「いえいえ、私の所のディレクターがすいません」

「いえいえ…そんなナ」

「こちらこそ…」

その様子に八神コウは呆れた笑みを浮かべて溜息を吐く。

「いや、もうそこでやめて。」

エンドレスな謝罪はきりが無いから」

りんも頬杖を当てて困ったように溜息を吐く。

「でも、ほんとに困ったわね…。」

「この忙しい時期に」

「あは、ごんもヒビキもそれくらいにしてさ、

これからどうするんですか？葉月さん？」

コウは苦い顔で彼女を見た。

P E C O の制作も佳境の段階というところに独断の新人採用。

紅葉とその友人の鳴海つばめの教育のこともある。

これから飛び立つ自分にとって不安要素は残しておきたくない、
というのが本音だ。

「あー、その点なら心配しなくていい。

私自ら彼女の指導を行う。私の独断だしね」

その言葉を聞いた初期メンバーは驚いた。

彼女はぶらついてさぼりがちな印象があるが、シビアな面を持つて
いる。

その彼女がヒビキを買うという事実に困惑を隠せない。

いや、コウは予感してたのかもしれない。

七年前のあの日から。

しずくはコウの暗い雰囲気を目敏く察知した。

彼女が一瞬だけかつてに戻ったような…

しずくは直感だが、コウとヒビキの間にある「何か」

因縁な様なものを感じた。

ヒビキを連れてきたのは直感だったが、これが吉と出るか凶と出る
か…。

(まあ、今は置いておこう。

気になるところではあるが…今はそれじゃない)

しずくは気持ち切り替え、ヒビキに対する提案、考えを提示する。

「それに彼女は一年前からモーシヨンやキャラデザイナーの勉強をし
てたらしい。

まあ、現場と机上は違うから私が追々流れを教えていく。

それに…」

「彼女は音楽関係のスキルが凄いやうで、

その伝手でスタジオや機材を借りれるのは大きい」

その言葉に全員が目を輝かせて、きらきらとヒビキを見た。

「今の話、ほんとなん？」

「ええ…ちなみに舞台衣装もありますけど…」

それこそゴスっぽいのが、魔法使いっぽいものとカ…」

オシャレに興味がありフリル系統を好んできてる彼女、

飯島ゆんは目を輝かせてヒビキに近づき手を取った。

「でも、ヒビキちゃん？はなんでその伝手があるの？」

「あつ、えーつと…私、週末インディーズバンドとして活動してるんです」

その言葉におお…関心めいた声が漏れた。

「ちよつとオーナーさんと仲良くなつて、何点か空いてるスタジオや機材、

衣装とかを貸してもらってるって感じですよ」

「そうなんやー…」

「ファンタジー的な仮装の衣装もありますから、

資料に困らないと思いますヨ？

私のソフトウェアの技巧は置いといて…

そういう伝手だけなら割と使えると思うのデ」

困ったように笑い、ヒビキはそう言った。

オシャレに目覚めてるゆんにはその情報は価千金だった。

思わず近づきヒビキを見上げる。

「ふむ、彼女を雇えばOP曲、

ED曲のコスパも時間も安上がりにはなるでしょうね」

うみこは顎に手を当ててしずくの意図を読み取っている。

「メジャーデビューしてない奴で悪いですけど」

「いえ、構いません。

その分、出費や契約も面倒なのでうち専属のミュージシャンというのも面白い試みです」

申し訳なさそうなヒビキの言葉にうみこは笑顔で返した。

その様子に安堵したのか、しずくはヒビキの背中からのそつと出てきた。

「ふっふっふ、なかなか好評のようだね。

ちなみに彼女は楽器関係なら偏りはあるものの、大抵は弾けるそう
だ」

「はい、ギター、キーボード、ドラム、サククス、ハーモニカとかがメ
インですけど、

三味線や琴、尺八とかもそこそこ」

「そんなにできるんですか!？」

涼風青葉もこれには驚いたのか、感心めいた声を上げる。

しかし、ヒビキは穏やかな笑みを向けてこういった。

「別に大したことはないですよ、

好きなら何だつて上手くなりたいじゃないですか、誰だつて…

皆さんもそうでしょ？

私は楽器も音楽も好きだったからこうなっちゃったってだけです
ヨ」

その言葉に青葉は納得してそんなことをさらりと言えた彼女に好
感を持った。

「それは…そうですねっ!」

「確かにその通りです。

だからこそイーグルジャンプを選んだんですから」

彼女の言葉に納得するものがあつたのか、

紅葉も肯定の意を示した。

「ふむ、なら決まりだね。

彼女の受けは悪くないようだ。私の審美眼も中々のものだろう?」

これまでの説明から割と即戦力とまではいかないまでも、

音楽業界の人脈、それに関係する技術は大きいものと皆がそう認識
した。

しかし、ヒビキは焦ったように待ったをかけた。

「待ってくださいイ、葉月さん。

志望動機をまだ言っていないんですガ…」

「おや、そういえばそうだったね。」

うちの会社を志望した理由は何かな」

一同も流れる的に合格しそうになって、
慌ててヒビキの話に注目した。

「つてかきー。」

ヒビキちゃんも黙ってとけば採用って流れだったのにさー」

篠田はじめは勿体無いといった音色でヒビキにそう言う。

「いや、流石にそれハ…ダメでしよウ」

はじめの言葉にヒビキは冷や汗を垂らしながら、
突っ込む。

一同は真面目だ、と内心思いつつ苦労してそうだなと

彼女に関して総評価した。

悪い評価ではないのだが、ヒビキ的には嬉しくないだろう。

「とは言っても…話しづらい内容なんですよネ。」

今の状態でハ…」

「…どういうこと、なの？」

ひふみは難しそうな表情で頭を抱える彼女をみやり、

伺うように尋ねる。

「これだけは信じて欲しいんですが、

私も結構ガチな理由でここで面接を受けてます、

その理由の一つに私の妹があるんですヨ」

彼女の言葉にゆんはある種の共感を感じた。

自分も弟や妹が面白いと思うゲームを作るのが理由だからだ。

「で、その妹…九能郷里くのうさとと言うんですガ…」

その子は明後日、ここにデバッグテスターのアルバイトに申込み
来ます」

その報告に若干、困惑したものの一回はそれがどうつながるか、
当然わからない。

「すいません、ややこしくて面倒な言い回しなのハ分かってます、

私の志望は妹に大きく関わることなのデ、彼女を含めた方が説明し
やすいんです」

何より…余りいい話ではないですシ

「ふむ…嘘は付きたくないが、本当の事を言うのは難しい…

という感じかな？」

「ええ、まあそんなところでス、

只、妹の郷里は私と違い活躍はしてくれるのは保証します」

強い目ではつきりと断言する。

余りにそう言うので妹びいきのシスコンかと感じたが…

「あの子がいれば多分、プログラムやデバッグ班の作業はかなり効率化されます。

そうですね…私の採用の取り消しを賭けてもいいくらいです」

「ええっ!?そんなに凄いの!?妹さん!」

「いや、でも私たちの作業ってそんなに簡単なものじゃないけど」

余りの妹の持ち上げっぷりに桜ねねは純粋に驚いたが、

鳴海ツバメは不機嫌そうに顔を歪めた。

まるでヒビキが自分たちの作業を蔑ろにしてまで妹を溺愛してるように見えたからだ。

その視線を感じたのか彼女は頭を下げた。

「不愉快にさせたのは謝ります、

ですが…あの子を見てやってください…

私のいう意味が分ると思います」

それを踏まえた上で、私の志望動機を改めて話します。

ツバメは彼女のその態度に困惑した。

「ちよ、ちよと待ってよ、何かマジみたいじゃん…

その妹さん、そんなに凄いの？」

どこか深刻めいたものをヒビキに感じたツバメ。

彼女は引きつった表情で聞き返してしまふ。

ヒビキはどこか疲れた表情で彼女に笑みを返すだけだった。

「まっ、まあ…即戦力が増えるのはいいいことじゃないか。

二日後が楽しみだな」

しずくは空気を変えるように手を叩いた。

「そうですね、いずれにせよ。

使える人材があるのなら越したことはありません。

彼女は真面目そうなので、その言葉を信じてみましょう」

うみこはふむと考え込みそう結論付け、一同は解散した。

そして今日は各々の作業に戻り、一日を終えたのだが：

ヒビキの言葉通り、二日後、郷里の能力に驚愕することになる。

「…私は同情や共感で採用などしません」

とりあえずヒビキはしずくに連れられて業務の手順を習う。
キャラデザ班の近くに隣接してる空いたブースでテキストを片手に、

ノートで書き写し黙々と彼女は勉強をしている。

ヒビキは暗記は基本、筆記で覚えていくタイプのようだ。

少し空いた時間に青葉たちは彼女の様子を見に行くのだが、
キャラデザ班たちは神妙な顔をしていた。

「ヒビキさん、真剣にやってるみたいですね」

「いや、まあ、流石にいい加減にはやらんやろ」

青葉は感心感心という感じで両こぶしをぐっと握って踏ん張る。

なんとなく「ぞい」と言いそうなポーズだ。

ゆんは苦笑を浮かべ青葉に突っ込む。

「でもさー…あのカツコって多分…」

「うん…間違いなく…葉月さんの趣味…だと、思うよ?」

冷や汗を垂らしてはじめてとひふみは彼女のカッコを見やる。

オフィスチェアに座り、背筋を伸ばしノートに何やら書き込んでる

ヒビキ。

その彼女の姿はメイド服だった。

しかも結構本格的な。

目の前にパソコンとキーボードがある空間でのメイドの存在。

違和感極まる状況だった。

「でも、似合ってますよね」

紅葉は感心したように呟いた。

「似合ってるからこそ、違和感が凄いやけど」

「まあ、多分葉月さんのせいですよね」

はじめと青葉は硬い笑みを浮かべる。

目についてしまったから、頭から気になって離れない。

だから、思いついて聞いてみることにした?

「あの、九能さん?」

「ヒビキでいいですよ？多分、妹も来ると思うのデ？」

柔らかい笑みを浮かべてヒビキは青葉にそう言った。

とつつきにくさがないその笑みに安堵を覚えて青葉は頷く。

（良かった、今度の人はちゃんと返してくれる人だっ！

ひふみ先輩に見たいにめんどくさくなくて、

望月さんみたいに無愛想じゃないっ!!

この人、イイ人だっ!!)

ヒビキの言動に感動してきらきらと指を組み、

青葉は彼女を見やった。

「青葉ちゃん…何か、失礼なこと…考えた？」

「私も何か、そんな気がしました」

青葉の嬉しそうなリアクションにジト目でひふみと紅葉は見る。

青葉はその視線に気まずさを感じて「あはは」と笑った。

「えっと、ヒビキさんの衣装ってやっぱり葉月さんの？」

「ああ…まあ、そのネ」

苦笑交じりにヒビキは肯定し肩をすくめた。

「世話してもらってるのは事実ですから、まあこれ位ハ…

それにメイド服着てバンドの経験もありますから別に抵抗もありません」

「おおく！それはちよつと見てみたいですっ！」

「私も見て、見たいかな」

青葉はきらきらと目を輝かせ、詰め寄る。

ひふみもコスプレが趣味なのでその光景に興味を持った。

「この会社にもブースも衣装もあるみたいなんデ、

暇ができたらやりますヨ」

自分的にはそうでもないと思ったが意外と好評のようだ。

ヒビキ的にも悪い気はせずすぐだったかった。

「あつ、そういえば今日やつけ？」

妹さんの郷里ちゃんの面接…」

そこでヒビキはちよつと硬い表情になった。

「そのことですね。」

「謝らなければいけないことがあるんでス」

「謝らなければいけないことですか?」

「どこか困ったようにヒビキはそう言い、

紅葉は小首をかしげた。

「妹の面接に関してはあは…うみこさんと遠山さん…

しずくさんに頼んで、プログラムの仕事の実力を見てもらうよう頼んだんでス」

「多分、郷里は面接形式だと合格できませんカラ。」

「?え、どういうことですか?」

ヒビキの言葉に五人は困惑した。

「そうですね…」

「じゃあ、休憩時間になったらプログラム班のところに行きましよう。」

「見てもらった方が早いです。事情も話しやすいですし」

プログラム班、ブース

うみこ、ねね、ツバメは驚いていた。

面接に来た目の前の少女は二台のパソコンデスクの真ん中に座り、

二つのキーボードを両手ブラインドタッチで操作していた。

指先が機械のような精密さで動き、プログラムが凄まじい勢いで組みあがっていく。

「こっ、こんなのアニメや映画でしか見たことがないよ」

「さどつち、凄すぎだよ!!」

「ヒビキさんが推すわけです…これほどの演算能力と暗記力、

器用さを持った人がいるとは…」

三人は彼女の組み、

修正したプログラムにミスがないか確認する。

「しかもパーフェクト、ですか」

「うう…でも悔しい」

「まあね。ちよつと妬けちやうなく」

他のプログラム班も似たような感想を抱いていると、

丁度、ヒビキたちと合流したしすぐとりんがプログラム班に来た。

「やっぱり上手くやってるみたいだね、郷里」

しかし、聞こえてないのか黙々と高速でブラインドタッチする。

青葉たちはその光景に驚いていた。

「ちよ、ええ…!?!」

「嘘っ、両手で二つのキーボードを打ってる!」

「しかも、めっちゃ早いやん、なにあれ!!?」

「凄い…どんどんデータが完成していつてる」

「彼女がヒビキさんの妹の郷里さん…」

しずくもりんも彼女に驚いて一瞬、茫然とした。

「なるほど、ヒビキ君が推すわけだ。」

確かにわが社の力になりうる人材だ」

「ええ…業務の効率化も夢ではないですね」

そこにいる全員の驚きを聞き流してヒビキは真剣な表情で、

妹である郷里に近づくと。

なんとヘッドロックをして椅子から引き離れた。

「っ!!?」

「へ!?!」

妹は呻き、周りは驚いたが…妹の方は無表情のまま言った。

「ああ、姉さんか。」

もう、そんな時間なの…?」

「ああ、時間だよ?一旦、休もう…それで私と一緒に面接をしないと、ネ?」

その言動と言葉に青葉たちは困惑を隠せなかった。

「郷里の演算能力は早く正確な分、制限があるんです。」

それが大体二時間くらいなんです。」

それを超えるとぶっ倒れて眠ってしまうんです」

「ええ!?!それ、大丈夫なんですか!?!」

ツバメだけでなく一同も驚いたが、

ヒビキは肩をすくめ微笑む。

「だから、こうやって無理に引きはがしてやらないと無理にやっちゃ
うんですヨ。」

倒れるまで…で、それを超えると三時間は起きないです。

充電するとまた出来るみたいでス」

ヒビキはその報告に一同は困惑した。

あまりに突飛すぎる報告と非現実めいたスキル、まるでゲームみた
いだ…

と一同はそう感じた。

「郷里…こつち向いて、あの人たちが上司で先輩なんだカラ」

「……」

姉の優しい言葉に妹は無表情にこくりと頷く。

「えーつと、とりあえずどつから話しましょうカ？」

郷里の近くに立ち、青葉たちの質問を待った。

「えつと、じゃあ、さどつちはどうしてそんなことができるのか…
を聞きたいんだけど…」

ねねの言葉をわかつていたかのようにヒビキは頷き口を開く。

「なるべく簡潔に話します、時間を取らせたらすいません」

「いえ、彼女が大幅にやってくれたおかげで余裕ができました。

今日はキャラ班含め全員、定時に帰れそうです」

「うっそ!？」

うみこの言葉にはじめは驚いた。

「それが郷里の能力でス、

この子は7年前この能力を手に入れてしまったんでス」

ヒビキの目線が郷里に向かう。

つられて青葉たちも彼女を見た。

面接の体ということでスーツを身に着けている。

スレンダーで細身の少女だ。

年齢は19歳で青葉、紅葉と同じ年…

しかし表情にも瞳にも覇気や輝きがない。

顔つきが可憐で童顔の分、どこか哀れさを誘う空気を持っていた。

そして、決定的なのは彼女は事ここに至るまで殆ど口を開いていない。

そして懐から写真を取り出す。

「これがその時の妹です」

12歳の郷里と13歳のヒビキ、

そして17、8位の端正な顔の青年が仲睦まじく映っていた。

その時の郷里の表情は笑っていて、

甘えるようにヒビキの腕に抱き着いていた。

「えっ、これが！郷里さん!?!」

「7年も経ってるのを引いても違いすぎるね」

「ええ、かわいらしい子で元気そうなのに」

青葉、しずく、りんはそれぞれに驚愕のアクションを返した。

周りも似たようなものだったので困惑だけが残る。

「同一人物ですよ、間違いなく。」

それは置いて置きます。結論から言うト、

妹の夢はこの会社に入ってキャラデザになることだったんです」

ヒビキのその言葉にますます訳が分からなくなつた。

プログラムの驚異的な処理能力を持つ彼女…。

そんな正反対の能力を持つ場所に惹かれていた。

「私たちの両親は父がイラストレーター、母が音楽関係の講師をしています。」

そんな中で育つて私は音楽に、兄と妹はイラストに惹かれていきましタ」

それは納得していたのか、

誰も異論も疑問も挟まなかった。

「そしてゲームだったんです、郷里ハ。」

ゲーセンでも知らない人はいない位凄腕ノ。

そしてクリアするゲームの対象にフェアリーストーリーもやり込んでましタ」

青葉はそこまで聞いて郷里に共感を覚えた。

(この子、私と同じだ…でも、なんで…?)

青葉も困惑したのか、表情どころか心を感じさせない彼女を見つめる。

「この会社のイラストに惹かれたんだと思います。元から父の影響も受けたのもあって、

今まで以上に兄とともに絵にのめり込みました」

「その、それが…どうして…」

紅葉も今の郷里が不思議で困惑を隠せない。

彼女も自分に近い何かを感じ、郷理を見て動揺を隠せない。

そしてヒビキはわずかな沈黙の後、耐えるように言葉を放った。

「所用で外に出た兄さんと郷理は、

信号を無視した大型車両に跳ねられたんです」

その言葉に重い空気のにしかかる。

「え…跳ねられたって…なんやの？それ!？」

あまりの結末に引き攣った半笑いのままゆんは尋ねる。

「言葉の通りですヨ…二人とも本来は即死…のはずでした、

しかし、兄が守ってくれたんでしょウ…郷理は五体満足で助かりました」

「という事はお兄さんは…もう」

「はい…見る影もなく碎けていたらしいです」

しずくの確認にヒビキは重い音色で答えた。

その凄惨な結果にどんよりと言葉を失った。

「しかし、郷理も完全に無傷というわけにはいきませんでした。

脳に損傷があつたらしいんです」

「じゃ、じゃあ…その結果が!？」

「はい…今の郷理です。」

どういうわけか、あの演算能力、記憶力、器用さを手に入れました。

でも…この子の感情はずつと…」

「そんなあ……」

ひふみは涙を浮かべて顛末を聞いた。

青葉も涙を浮かべて郷理を見つめていた。

「この子は7年間何が楽しいの力、面白いの力、悲しいの力…

自分自身でも忘れていてテ…その後、誰からも避けられテ…
思い出してきたのか、ヒビキも声が震えて涙声になっている。

「でも、この子は辛いことももうわからなくなっテ…!!」

近くにいたゆんが涙を浮かべてヒビキの背中を擦っている。

「でも、一っだけきっかけが残っていたんでス。

何も感じなくなっても、郷里はあのゲームだけは…

フェアリーズストーリーをやり続けてたんでス」

しゃくりあげそうな音色を何とか整えて、

ヒビキはメンバー一人一人の顔を見る。

「このゲームの面白さは分らないけど、何故かやりたいんだっテ…

その言葉を聞いたとき、ここに就職を決めたんでス」

そして彼女は郷里の後頭部に手を置いて、妹共々頭を下げた。

「あの頃は戻りませんツツ、今の妹も大事でスツツ！

ですがツ、この子が心や楽しさを取り戻す為に私はここに来まし

タツ…！」

改めてお願いします!!私たちを此処で働かせてください!!

ヒビキの涙の懇願が響く。

一同はその志望動機に何も言えなかった。

妹の感情を取り戻すきっかけを探し入社した、という理由なのだか
ら。

しかし、彼女と郷里がここに入社したとしても郷理の心が取り戻せ
るかは未明だ。

余りにも予想斜め上の答えに青葉たちは困惑したが、

ベテラン班は落ち着いていた。

そしてうみこは瞳を閉じて静かにヒビキに向かい目を向ける。

「…私は同情や共感で採用などしません。

それでやっていけないんては本末転倒ですから…。

第一、ここで働いたとして妹さんが戻るとも思えません」

「ちよ、うっ、うみこさんっ!?!」

「それはっ、あんまりじゃ…！」

うみこは頭を下げる姉妹に腕を組み厳かに言う。

ねねもツバメも不憫に感じて抗議するが…

「ですが、妹さんの実力は短期勝負とはいえ使えます。

ちゃんと面接できないのは残念ですが、

貴女がフォロワーするなら問題ないでしょう」

「じゃ、じゃあ!?!」

その言葉に涙をこぼしてヒビキは顔を上げる。

「ええ、郷里さんは合格ですよ」

うみこは笑みを浮かべてヒビキに近づき、彼女の肩に手を置く。

感極まった笑みでヒビキは上体を起こし破願した。

「ありっ、アリガドウ…御座いまあスウ…」

嗚咽交じりにヒビキは感謝の言葉を述べ、上体を起こした。

「うむ…私は基本的にウエルカムだよ」

しずくは最初から決めていたのか、どこか軽い調子だ。

「何ですか、それ」

苦笑を浮かべてヒビキは涙を拭った。

「では、ようこそっ、イーグルジャンプへ！」

私たちは君たち姉妹を歓迎しよう」

しずくのその言葉に一同が歓喜に沸いた。

ゆんはヒビキの腕に抱きつき、良かったなあと貫い泣きしている。

はじめは彼の頭を涙を浮かべてガシガシ撫でている。

「ヒビキちゃんっ、ホンマよかったなあ〜っ!!」

分からん事あったらうちに言うンやでえ〜っ!」

「そうだよっ、独りで何も抱えなくていいんだかねっ!!」

「はいッ、はいッ…!」

自分の事のように喜ぶゆんとはじめに涙を拭いながら、

ヒビキは何度も頷いた。

青葉と紅葉は郷理に近づいて挨拶と雑談をしていた。

本来、同じものを目指してる彼女を何とかしたかったのだろう。

青葉と紅葉の元気で静かな自己紹介の後、軽い雑談を交わした。

その後、休憩時間も終わりそれぞれの作業に戻るのだが、

会議室の外から見ている一つの影があった。

「……………」

その様子を物陰から見えていたのは八神コウだった。腕を組み壁にもたれかかり、悔いるような表情をしていた。

(コウちゃん…?)

りんは先ほどから見えない彼女にようやく気付いた。

窓から見る彼女は早足でその場を離れていくのが見えた。

そしてその彼女の姿を見る視線がもう一つ。

(八神…コウさん…)

どこか寂しげな眼を去っていくコウに同じ目でヒビキは見送るだけだった。

「ええ、もちろん！　　八神さんは憧れの目指すべき存在の人ですっ！」

翌日、久能姉妹は二人揃って入社することになった。

そんな状況の中、ヒビキは思案した。

音楽関係の仕事が希望だったが、募集求人にそれが載っていないかった。

一応、付け焼刃でキャラデザの勉強はしていたもののまだ実力不足だろう。

応募したものの希望の場所にすぐ行ける、

という虫のいい前向きさは捨てるべきと考えていた。

採用には感謝はすべきだ。

だからこそ、これ以上の高望みは気を付けたほうがいい、

そうヒビキは自戒した。

そんな事を心に留め、

会議室のブースでしずくと対談をしていた。

「流石に郷里君のようにすぐに業務は無理だろうね」

「一緒にしないで下さいヨ。」

本来、持てるはずのない物を間違って手に入れてんですから」

メイド服に身を包んだ彼女、

ヒビキは背筋を伸ばしてしずく社長の正面に座った。

しずくはヒビキの正面に座って彼女の企画書を見ていた。

彼女はヒビキにどんなゲームを作りたいのか、という課題を与えていた。

「何というか、発想がメタ的に豊かだね。君は。

方向性は違うんだが、どこか八神を思わせるな」

「っ、そうですか？ 光栄ですネ。その言葉ハ」

「デザインの描画力は流石に青葉くんや紅葉くんに劣るが、

着眼点が面白いね」

彼女の持ってきたゲームの企画書はリズムカルな音ゲーものだ。

舞台はコンピュータの中の電脳世界で蔓延する

バグやエラーをリズミカルなボタン操作で消滅させていくというもの。

特殊なアバターを使い、バグ消滅のクエストをこなしていくもののだ。

しずくが目を引いたのは、舞台設定が現代に近い近未来。

バグやエラーを消滅させるための電脳アンドロイドというアバターが普及。

ゲーム会社はそのアンドロイドを駆使し、

バグやエラーを倒していくというもの。

アンドロイドは最初は最低限の人工知能しか有していないが、

育成の要素も兼ね、ユーザと心通わせることにより感情を確立していくというものだ。

「割とよくある設定とは思いますが…」

機械が感情を持つとか、敵を倒すためのアンドロイドとか」

「おいおいヒビキ君？卑下はよくないよ。」

私的にはゲーム会社のデバッグ作業を音ゲーにしているという発想が好みだ。

プログラム班には結構好評だと思うよ」

「ははっ、だといいんですガ」

「私たちの苦労をわかってくれてる、ありがとうみたいな」

「あー…そっちですかア…」

ここに来る途中、

ちらつとだけデバッグ作業とプログラミングに苦労してるねねとツバメを見かけた。

郷里はスキルはスキルだけに使いどころやタイミングをうみこと話していた。

（便利ではあるけど、使いどころを考えないとだからネエ…

強力な何だけどネ、郷里の瞬間記憶演算能力ハ…）

「郷里くんのごことが心配かい？」

「あー…まあ、作業はともかくコミュニケーションがからきしなのデ

…
仕方ないといえば仕方ないんですが」

その言葉にしずくは納得した。

確かに彼女は普通の面接で採用は不可能だろう。

だからこそヒビキは彼女の演算能力を見せつけて、手放すのが惜しいと思わせたのだ。

彼女の回りくどさも今なら納得というものだった。

「うみこくんは辛抱強く面倒見がいい。」

桜くんも鳴海くんもみんない子たちだよ」

「ええ、それは知ってます。」

言うほど心配はしてないですよ」

あの子も割と愉快なところはあると思いますシ…。

「では、桜さん、鳴海さん、郷里さんも少し休憩にしましょう」

「ふう、やっぱ肩こるなあ〜」

「ねねっち、基本じつとしてるの苦手だしね〜…」

さとつちはあ〜？」

椅子から立ち上がり伸びをするねねとツバメ。

そして、無表情に突っ立っている郷里。

「……………」

真顔と無表情のままノーリアクションだ。

しかし、数秒後には緩慢な動作でコックリとうなずいた。

(あつ、あんなに仕事の動作が早いのにっ、

リアクションがスローライフだよっ！)

(たぶん、さとつちにとってはこれが普通なんだ、うん…)

ひふみや紅葉を遥かに超える上限しらずのコミュニケーションを発揮する郷里。

しずくも思っていたが、これでは確かに面接は通らないだろう。

じーーーーー。

「なっ、なにかな？さとつち？」

「えっと、どうしたの？」

「私…やりたいこと…も、動機も、わかんない…」

楽しいことも…苦しいことも…わかんない…」

訥々と郷里は言葉を落とした。

うみこもその主張を静かに聞いている。

「こんな私を…お姉ちゃんが…いつまでも、私を、

構ってくれる、理由もわかんない」

どうしてこの人たちは、構って、くれる、の？

郷里の言葉に三人は静かに受け止めてそれぞれ口を開く。

「私は実力を評価しただけですよ。

…実際、あなたはそれに応えられる技能を有している、

では不満でしょうか？」

あくまでも情を排した言葉だが、

過度な憐れみを向けることはうみこは良しとしていない。

「少なくとも、ヒビキさんがきっかけではありませんが…

それだけの理由ではありません。

あなたと仕事をしたいと思ったのが、全員の総意です」

「そーだよっ、私たちっ、さどつちの事大好きだからねっ！」

「それに面倒見るのはももで慣れてんだし、

扱い使う必要なんてないんだからっ」

その言葉に郷里は一瞬、沈黙し…。

「…うん、わかり、ました」

とだけ返した。

その返事はねねとツバメは嬉しそうに笑い、

互いを見やって手を組み合わせ、うみこは見守るように笑んでい

る。

昼時。

キャラハンブースで五人は談笑していた。

「ヒビキちゃん、葉月さんに企画の提出の課題を受けてたね」

「せやったなあ〜、上手くいってるやろかあ〜」

はじめのその言葉にゆんはその言葉をきき、

心配そうにおろおろとしている。

「ゆん先輩、何かお姉ちゃんかお母さんみたいですよ」

青葉は苦笑しながらゆんを見ていた。

「ははっ、うちも妹おるしな。兄はおらへんけど、弟もおるしなあ…妹のためにここに来たっていうのはうちには共感できるんよ」

「あー…でも力になってあげたい子だよな」

「でも、力になってもらわないと困りますよ」

紅葉はすこし厳しい表情でそう言う。

「紅葉ちゃん、ちよいとそれは厳しいんじゃない？」

青葉は若干容赦ない言葉を宥めるよう止めるが…

「あの人は私たちより辛いことを味わってきたんです。だから、乗り越えられる人だと思います。」

私はあの人と一緒に仕事ができると思えますから」
生真面目に紅葉は返した。

青葉はそんな彼女の言葉に優しい目を向けて微笑む。

「そう、だね…あの子は一生懸命、だもんね？」

報われるよ…きつと…」

ひふみは拳をぎゅつと握って一緒に仕事をする未来を想像していた。

社内の別のブースでコウは絵を描いていた。

そんな自分の背後に見知った気配が近づいてくる。

「どうしたの？」

「コウちゃん…」

母性的で心配を含んだ音色が彼女の背に響く。

その人物は自分のことをよく知っている相棒の声だ。

「ん？ああ、りん？」

「ちよつと手が離せないんだ、またあ」

「後で、と言おうとしたが…」

「コウちゃん、ヒビキちゃんたちと何かあったの？」

「っっ!？」

その言葉にペンを止める。

「なっ、何かってなにきつ!？」

あくまで背中を向けたまままで動揺した音色でりんに放つ。

このリアクションは何かを悩んでいるときだ。

「コウちゃん、あの子達が来てから何か変よ？」

緊張してる…ううん、怯えてるみたいで」

「そんなことっ、ないっ!!」

ペンを叩きつけるようにおき、ブースに響き渡る声で叫んでしま
う。

その様子に青葉たちはびっくりして、視線を彼女に向けてしまう。

「やっ、八神さんっ!!」

青葉はびっくりして席を立ち上がり、ブースを確認する。

りんはそのようすにびくつと震えてしまう。

反射的に組んだ両手を胸元に当てている。

「っ、ごめんっ、頭冷やしてくるっ!」

「ごっ、コウちゃん!？」

乱暴な足取りでコウはその場から逃げるように立ち去ろうとした
が、

向こう側から扉が開き、コウは思わず立ち止まる。

「っ…あ…」

「!…ねっ、ねえ…やっ、八神さん…」

しずくとともに歩いてきたヒビキは目の前のコウと鉢合わせし戸
惑う。

それ以上に戸惑ってるのはコウで目を逸らし、ずかずかとその場を
後にした。

「ふむ…なにやら、大変なことになってるようだね。

それにヒビキくんはなにやら知っているのかな?」

穏やかな笑みだが射抜くような目線を彼女に向ける。

「別に後ろめたいことは隠してませんヨ。

黙っていたのはどちらかというト…」

去っていくコウの背中を苦しそうな笑みで浮かべていた。

「なるほど、原因は八神か。」

「まったく、今も世話をかけるな」

そのやり取りを見ていた青葉たちの視線が突き刺さるのを感じ肩をすくめた。

「遠山さん、いいですか?」

「ん? なにかしら?」

困惑するもののヒビキとコウの間に何かあると感じ、不安と若干の警戒を含んだ目を向ける。

「あの人の…コウさんのところに言っただけでお願いします。」

たぶん、あなたなら話しやすいと思います」

真剣で真つ直ぐな目で、りにそう言う。

彼女の言葉に真剣さがあつたのでそれを信じてみることにした。

そしてりんがコウについていくのを見届けた後、

ため息を吐くと腹を決めたようにキャラハンブースに行く。

「あのっ、ヒビキちゃんっ!」

「はい? 何ですか?」

初対面時に部類のコミュニケーション力を発揮した青葉、

すでにちゃん付けで呼ぶ気安さを身に着けていた。

「あつ、あのっ…ヒビキちゃんと八神さんって知り合いなんですか?」

困惑するように青葉は言う。

キャラハンどころか、プログラマ班たちも青葉のその問いに耳を傾けた。

この会社のエースであり主力の彼女と新入社員がどう繋がるのか

…
そんな無粋な好奇心を抑えられなかったのだ。

「知ってますヨ。」

私たち出身は奈良ですが、

両親の仕事の都合上東京に越す事もあつたんです」

そこのお隣、というか近所にいたのが八神さんでした。

その事実にあまり動じないしずくも目を見開いて驚いた。

しかし、気になったのは…。

「でも、やったらどうして二人とも…知らん振りしてたん？」

「そうだよつ、別に隠す必要なんかっ」

「ひよつとして、コネ扱いされるのが嫌だったとか？」

ゆん、はじめ、ツバメは順に疑問をぶつけていくが、

三人の問いにヒビキは首を振った。

「いえ、私たちは徹底的にズレてしまったんです。

七年前二…後、鳴海さん？もうここまでできたらコネ使っても入り

ますヨ、私ハ」

前に聞いた七年前のワードに一同は困惑を隠せない。

「わかりません、それがどう繋がって今に至るんですか？」

静かに強く目を向けて紅葉は尋ねる。

「本当は黙っておきたかったんですが、これに関しては本当二…

しかし、八神さんはここの要ですよネ？」

「うん、そうだよ。

だから、理由を知っておきたい…。

今の八神の雰囲気は七年前を思いだすよ…」

あのままでは空回ってしまつていい作品を作れないだろう。

「…だから、お願い。ヒビキちゃん…教えて？」

あなたと、コウちゃんに何があつたの…？」

しずくとひふみの言葉に一瞬だけを瞳を閉じる。

「言つたはずですよ。」

兄と妹が轢かれた…それが私の本当のことです。

そして私たちはあの人を姉のように慕っていましたタ…」

そしてヒビキは口を閉ざした。

「ちよつと、ヒビキン？それだけなのー？」

もつとほかに何か…！」

「これ以上言いようがないんですよ。」

この事実がすべてです」

ねねはあまりの情報量の少なさに不満交じりに問う。

やはり青葉たちも分からないのか、言葉を望むように彼女を見た。

しかし、うみこもしずくも驚いたようにヒビキを見つめた。

「なあ、君は姉のように慕ってたって言ったな!？」

「だとすれば…八神さんは…あなたたち姉妹は…」

二人はヒビキの言う意味が分かったのか、
困惑していた。こんな展開は予想外だからだ。

「成るほど…我が社にくる訳だよ。」

妹のことだけじゃなく姉貴分の八神が心配だったんだね」

「しかし、縁というか業というものを感じますね。」

「これは…」

事実を知った二人は辛そうにヒビキを見やった。

「ねえ、もしかして…」

「ホンマなん!? やったら…八神さんは…」

ひふみも何か気づいたのか驚いたように、
どこか辛そうにヒビキを見つめた。

ゆんは瞳に涙をじわりと溜めている。

「ちよつと待つてよつ、

ぜんぜん分かんないんですけどっ!」

「そつ、そーですよっ!」

私たちにも分かるように説明してくださいっ!」

「何でそんなすぐに分かるんですか…?」

分からない組の青葉、紅葉、はじめ、ねね、ツバメは不満げにもら
す。

ひふみはその様子を宥めながら事情を説明した。

「…要するにね、ヒビキちゃんたちのお兄さんが…」

コウちゃんと関係があつたってことだよ」

その言葉に納得したが、

同時にもう彼はこの世にはいないという事実が困惑させる。

「幼かった私でも分かりました…」

コウさん、コウ姉さんと…兄さんは交際していた恋人同士だったん
でス」

「ええええええ!!!!?」

その驚愕の絶叫がブースに響いた。

「えっ、何々々っ!?!」

じゃあ、八神さんとヒビキちゃんって…」

「兄が生きていたら…義妹になってたでしょうネ。

いえ、違いますネ…私は今でもあの人を姉だと思ってます。

それ程、兄さんとコウ姉さんは通じ合ってます」

「でも、だったらなんで…今みたいになっちゃったの?」

青葉は困惑するように尋ねた。

「東京にいたとき、私たちはすぐに仲良くなりました。

コウ姉さんは私たちにかまってくれテ、

郷里の事も面倒を見てくれました」

両親がアート関係の共働きだったんデ、

そんな私たちを気にしてカ、学校終わりはいつも来てくれました

懐かしむような笑顔でヒビキはそう語る。

「ですかラ、私や郷里が習ってた音楽や絵に触れる機会もあつたんでス。

そしてそこには同世代の兄がいつも絵を書いていたんでス」

「で、ではっ。八神さんの絵のルーツは…」

紅葉は驚愕を浮かべてヒビキを見やった。

「ええ…兄の影響でス。

コウ姉さんをいつも被写体にして練習してましたカラ…。

あの人、じつとしてるの苦手だから仕返しに兄の絵を描くって息巻いてました」

「…変わってないですね」

うみこはあきれた様に肩を竦めてため息を吐いた。

「そーですネ。でも、絵は昔とは比べ物にならない位旨くなってますヨ。

姉さんの絵は…それは貴女たちが知ってるはずですよネ」

その問いに一同は頷いた。

「郷里は兄より、姉さんの描いた絵の方が好きで…兄はいつも嘆いてましたヨ。」

「どちらも小学生のころから凄かったんですけどネ」
微笑ましい内容に一堂の空気は弛緩していく。

「コウとヒビキ、郷里の過去を想像して微笑ましくなったのだ。」

「コウ姉さんにとって、妹の郷里は自分の絵のファンの一号でしたカラ…」

「それが嬉しかったんでしようネ。姉さんはよく郷里と絵を描いてました」

無表情の郷里を見やり、青葉たちの心は締め付けられる。

今の彼女は多分、それすら分からないのだろう。

「兄と姉さんと二人は競い合うように書いていて、

そしてその流れで進路を決めようとしてました…」

「当時、私は二人は漫画家かイラストレーターに進むと思ってました」

「でも、八神が就職したのはここだった、と言うわけだね」

しずくの指摘に困ったように笑みを浮かべてヒビキは頷く。

その理由が興味津々なのか、ヒビキの言葉を待つ。

「理由としては音楽関係の私と一緒にやれる仕事があったら…」

との理由でしタ…あの時は本当に嬉しかったでス」

「あー、確かにこの業界ってイラストと音楽関係が一緒にできるしねー」

ツバメは納得したように頷く。

「八神さんはヒビキちゃんのためにゲーム会社に入ったんだ…」

(やっぱり、優しい人なんですネ…八神さん)

しかし、そこから先のヒビキの表情は暗かった。

「小学校の中頃までは東京にいたんですガ、

また、奈良に帰ることになってしまいましたタ」

そして、兄さんと姉さんの高校卒業間近に…事故が…。

「ちよ、ちよいまちいなっ！」

事故のことはしんどいと思うけど、何で八神さんもヒビキちゃんも

…」

「互いを避けてる…ですか？」

ゆんの疑問にヒビキは予想してたかのように笑む。

「兄の事故が会った年、姉さんはこの会社の面接に来タ…

それはしずくさんが知ってますよネ？」

「ああ、もちろんさ。」

随分と無愛想な奴が来たなって、けどその理由も納得したよ」

「私が兄を失ったんなら、姉さんは恋人と自分の最初のフアンを失ったんでス。」

そして一番見たかった夢、私たち四人の夢ヲ…」

「そんなあ…」

その事実には青葉も紅葉もたまらず表情を曇らせる。

「実ハ、姉が高校卒業と同時に就職するのを私は止めたんでス。」

余りにも自棄に見えテ、投げやりで危なっかしかったのデ」

「うん…分かるよ…コウちゃん…」

どこか張り詰めてたから…」

ひふみは当時は振り返り、悲しそうに呟く。

何というか焦り、生き急ぐかのように仕事に没頭している彼女を見てきたのだ。

りん共々に心配していたことでもあった。

そしてフェアリーズストーリー2のあの事件だ。

あの時のコウは本当に見てて辛いくらいに落ち込んでいた。

「だから週末両親に無理を言い、お金を借りて東京と奈良を往復して…

できるだけ姉さんに就職をやめてゆっくり養生してほしい…

そう頼み込んだんでス」

そう言うのと天井を見上げ、ため息交じりに零す。

「あの時の姉さんにはクリエイターとしてのモノ…

兄が言っていた事を忘れていたと思ってましたカラ」

「ヒビキちゃん…」

「ですが、そんなに心配して目の前に阻む私をウザったく感じたんで

しよウ。

私にも苛立ちをぶつけてきたんでス」

「そんな…ヒビキちゃん何も悪くないじゃんっ!!」

「っ、姉さんだつて悪くありませんっ!!」

はじめの非難する講義にたまらずヒビキは叫ぶ。

全員が驚いて息を止める。

「っ、すみませんッ…でも、姉さんのことハ…」

「ねえ、さん…」

それほどまで沈黙と無表情を保っていた郷里。

彼女が静かに口を開いた。

「さと、り…っ…どうしたノ？」

「言われた、事…傷ついた、事…言ったほうがいい…。」

耐えたら、だめ…だと思ふ…ねえ、さんは私とは…違う」

「そうやで…八神さんの事で溜め込んでるんやろ？」

ヒビキちゃんは強い子や、やけどな？もちつと弱音を吐いていいん

やで？」

ゆんは笑みを浮かべてヒビキの頭をなでる。

その時に胸を突く痛みが彼女に響き渡る。

「なら、一つだけ…約束してください…」

この言葉を聴いてモ…姉さんを嫌いにならないでください」

「ええ、もちろん！」

八神さんは憧れの…目指すべき存在の人ですっ！」

「そうですよ。

見損なわないでください。

言葉一つで憧れも尊敬も消えません」

とりあえず二人の言葉を聞き入れ、目を閉じた。

ヒビキは目を閉じ、当時を思い返してその言葉を伝えた。

ヒビキ、あんたを見てると私は苦しいんだよっ!!
アンタガ私と居るだけでっ、私は死にたくなるんだよっ!!!

なんで清太郎せいたろうを守ってくれなかったのさっ!!!
なんであんたが生きて清太郎が死んだの!!

返してよっ!!
私の好きな人を…アイツを返してよ!!!

「りんっ…:私はいつにどう償えばいい？」

どう謝ればいい…:」

コウは屋上の壁にもたれかかりしやがみ込み、
頭を抱えて涙に震え嘆く。

「コウ…:ちゃん…:」

コウから自分とヒビキたちとの関係を聞き、
自分がかつての妹分にしてしまった仕打ちを思いだした。
そしてそれを相棒のりんに吐き出した。

りんはその過去に驚きを隠せなかった。

だが、当時の張り詰めたあの空気も孤立気味の性格。
納得できる要素は多分にあつた。

あの時はもう自分の世界が閉ざされた気がしたから…:
何もかもがどうでもよかつた、良くなつたのだ。

だが、結局その絶望も一過性のものだということ。
それをりんや青葉たちスタッフによって教えられたのだ。

「辛いのは私だけじゃないのも分かってたんだっ、
兄が死んで郷里がああなつたんだっ！

アイツが辛いのは分かってたっ…」
頭を抱えてうめくコウ。

りんは何もいわずに近づき彼女を抱きしめる。

「許してくれないし、今度はコウちゃんを否定する立場かもしれない
わ…。」

でも、コウちゃんは自分だけ楽になりたいの？

許してほしいから謝るの？許してくれないと謝らないの？」

優しく穏やかだが、厳しさを含んだ音色でりんは尋ねる。

その言葉にはっとしてりんを見る。

「コウちゃん、思い出して…？」

ヒビキちゃん？さつき、あなたに会ったとき…こう言ってたわ」

…ねっ、ねえ…やつ、八神さん…

「あの時、ヒビキちゃんは『お姉ちゃん』って言おうとしたんじゃない
かしら？」

「…あ…」

「もちろん、私の妄想の可能性もあるけれど…

これが本当ならコウちゃんはまた拒絶するの？」

その言葉に反射的に首を横に振って否定した。

その動作ができた事に驚いた。

自分はまだあの二人を妹だと思っていると。

「そうだね、りん…。」

許してもらえなくても、もう姉の真似事ができなくてもケリはつけ
ないし…」

顔を上げてコウは涙をぬぐった。

遅すぎる謝罪だ。だからこれ以上待たせるわけにはいかない。

今度は私が鬱陶しく構うんだ。

あの子達の姉として

「私、いくよ…。」

りん、いつもアリガト」

「慣れてるわよ。」

本当に私が居ないとだめなんだから」

苦笑を浮かべてりんは相棒に向かい笑みを浮かべ、

妹の居るところへと向かうコウの背を見送った。

「可笑しいですよネ…慕ってるって言ってたのニ、姉さんに話しかけられるのが怖いんですカラ…」

結局私が一番、姉さんの事を信じてないのかもしれない」

ヒビキは涙を零して青葉たちにそう訴えていた。

「取り戻せるなら、また少しでもあの時に戻れるなら…」

でも、それが出来ないんです。

あの言葉を最後に私は逃げ出し、姉さんを一人にしてしまいました
夕」

ヒビキの苦しむような独白に一同は涙を浮かべて聞いていた。

「分かっていたんです！」

姉さんが今のままじゃ孤立する事モ、誰もついてこない事モ…

私だけは居てあげなきゃ行けなかったのニ…」

「いや、そのときはまだ君は小学生だろう？」

それは仕方のない事だよ」

しずくは自責に駆られるヒビキの頭をなでて微笑む。

「それに、利己的な言い方だがそう言う過去があったからこそ…」

私は八神を見出せたし、青葉君や紅葉君はコウに憧れ来てくれた。加害者には感謝しないが、君にはそう言う意味では感謝をしている」

「…そう、ですか…」

そしてそのまま黙って聞いていた青葉と紅葉は同時に立ち上がり、ヒビキの両手を取った。

「え…？」

「行きましょう！ヒビキちゃんっ！」

八神さんのっ、お姉さんのところへっ!!」

「そうです。怖いなら私たちがついて行きますから…！」

「青葉ちゃん？」

「ももっ!？」

ひふみとツバメは二人の行動に驚きを隠せない。

「でも…私ハ」

「今の八神さんはそんな人じゃないですっ！」

私たちは今の八神さんを知ってますっ、ルーズでだらしないですけど…」

とても優しい人ですから！」

「私はそこまで知りませんが、

あんな絵をかける人が今も悪い人とは思えません」

「だから…！」

「ですから…！」

置いて行っちゃったお姉さんを取り戻しましょうよっ！

青葉はヒビキの不安を吹き飛ばすようにそう言い、紅葉は彼女を安心させるように彼の両肩に手を置き微笑んだ。

青と赤の若葉が響く苦悩を散らす。

その時はすぐそこまで来ていた。

「ヒビキちゃん、ハードルを上げないでくださいっ!!」

長身の少女の背中を押す、二つの小柄な影。

一人は九能ヒビキであり、二つは涼風青葉、望月紅葉その人たちだ。

「意外と二人共、力強いんですね」

「そつ、そうですね、寧ろ体力ない方なんですけど」

青葉は困ったように笑い、頬をポリポリ搔いた。

むしろ運動もしてないので落ちてると思っっているが…。

「というか、ヒビキさん…相当鍛えてませんか？」

背中がなんか硬い…いえ、引き締まっていますよね？」

紅葉はメイド服腰に感じる背中の手触りに感心するようにいう。

「あつ、ホントだ。」

ヒビキさん結構鍛えてるんですね？」

青葉たちの感想を聞いてため息を吐く。

「まあ、楽器を使うのって体力勝負だからねエ。」

サックスとかトロンボーンは肺活量使うシ、

アコーディオンは重いシ」

「なるほど、だから締まってるんですね。」

私、お肉つきやすいんで羨ましいです」

青葉はキラキラ視線をヒビキに向ける。

しかし、ヒビキはヒビキで青葉にこういう。

「でも変にゴツくなるから体重は軽くても細マッチョに成りそうなんだよねエ」

「あ…ムキムキになりそうなんです」

青葉は自分に筋肉が付いたボディを想像したが、

んーと悩ましげに頭をひねる。

「それはそれで死活問題ですが早く行きましょう。」

八神さんの元へ」

話と目的が脱線しそうになったので紅葉は釘を刺した。

「あつ、そうだねつ、紅葉ちゃん」

「…二人共、有難ウ。ついて来てくれテ」

そういうとヒビキは振り返りふたりの右手を優しくとった。
その行動が疑問に思つて二人は首をかしげる。

「貴女たちの商売道具をこれ以上、酷使させるわけには行かないから…」

「御免ネ？二人共？」

「いえいえいえつ、私の手のことなんて気になさらずにつ！」

それにまだまだですよっ！」

「そうですねっ、何か恐れ多いです…八神さんの関係者にそう言われるのは」

二人のその畏まった言動にヒビキは困つたように首を振つた。

「そうやって畏まれそうだから黙つてたんだけどネ。」

それに妹分つてただけだから、サ」

ふたりの右手を優しく包んだままヒビキは笑みを向ける。

「私の方が確かにちよつと年上ではあるけど、

ここでは先輩なんですからもつと堂々としてくれてもいいんですヨ？」

あーでもつ、私みたいなムキムキな後輩は要らないかア」

前半は優しげに後半は落ち込むようにヒビキはそう言う。

二人に背を向けて三角座りをして落ち込んでいる。

「わわつ、そつ、そんなことありませんよっ!!」

大歓迎ですよっ！ねっ！紅葉ちゃんっ!？」

「っ…ええ…」

私もその…」

付き合いの短い彼女に関して紅葉はどもつてしまう。

彼が気さくに話せるのはツバメだけなので、

とつさのことにどうしていいかわからない。

青葉とも大分打ち解けた方ではあるが…

ヒビキに関してはハードルが高いようだ。

「んっ？」

ヒビキは背中越しにその反応が面白いのかニコニコと笑みを浮かべている。

元々、そんなに落ち込んではいない。

二人のリアクションが面白そうだからだ。

「じゃあ、こうしましょう。」

いきなりは無理そうなのデ、紅葉さんは「ちゃん」づけで呼んでください」

「ふえええ!?!」

いきなりの振りに紅葉は顔を赤くしてギョドる。

青葉はどこか楽しそうなヒビキの気配と彼女の余裕のない姿が面白くて…

(ヒビキさん、やるなあ…私ものっかろく☒)

そしてにっこりと青葉はヒビキを見つめ…

「じゃあ。ヒビキちゃんっ、そろそろ八神さんのところへ行きましょうか?」

(涼風さんっ!? 順応早すぎでしょう!?)

「いや、私は紅葉さんがちゃんづけしてくれるまで動きません!」

(ヒビキさんっ!? なんでそんなに必死なんですか!?)

「だって呼ばれないじゃないですか!?! ねえ、青葉ちゃんツ!」

「はいッ、私も呼ばれますッ! ヒビキちゃんツ!!」

どこで通じ合ってるのか、二人は切実に素晴らしい固い握手をした。

しかもすでにちゃん付けである。

「くっくッ…もうッ、知りませんツ!!」

顔を真っ赤にして頬を膨らせて二人より先にずかずかと歩いていく。

「ちよつとまっテ、紅葉さんツ!」

「というか貴女だけ先に言っても意味ガ…」

「紅葉ちゃんっ、ごめんごめん、だから置いてかないで」

二人は笑いを堪えながら紅葉を追いかけた。

紅葉は不意にぴたつと止まり、こちらに顔を向けずに行つた。

「…ヒビキさん、あなたがちゃん付けで呼んでくれたらやりませ

私だけさん付けは不公平ですっ」

そういうと青葉は楽しげにヒビキは嬉しげに微笑んだ。

すると、向こうから足音がコツコツと聞こえてきた。

暗がりの廊下だったが、人数的にあの二人しかいなかった。

「…姉、さん…」

「ヒビ、キ…」

やや緊張した顔持ちでコウはリンを伴い彼女の前に現れた。

ヒビキも緊張してるのか表情は硬い。

「よお…」

「はい…」

コウは硬い笑みで軽く手を挙げた。

同じく硬い笑みで響きはうなずくだけだ。

七年間のズレは二人の中にシコリと溝をはつきりと残していた。

なにを言えばどう謝ればいいのかわからない。

否定された妹と見捨てた姉…互いの後暗さが互いを縛っていたが

…

「コウちゃん、ちゃんと言わなきゃダメでしょ？」

りんは彼女の背中をそつと押した。

「ああ…私が姉だからな？」

苦笑しながらコウはヒビキを見つめ近づく。

「まだ、妹と思ってくれてるんですネ。」

肝心なトコで見捨てちゃった私ヲ…」

「つつ、違うつつ!!」

お前に八つ当たって拒否したのは私だっ!

お前は何も悪くないっ!!」

自嘲気味なヒビキの言葉にコウはたまらずそう叫んだ。

「それでもツ、私が強ければ…ちゃんと側にいれたんですッ!

あの時の私は姉さんが怖かったんですッ!

郷里もああなつて兄さんも居なくなつてツ…」

この上つ、姉さんまで居なくなつて…否定されるのが怖かつた。

そんな現実が耐えられなかったんです!

姉も妹も兄もいなくなる現実なんて認めたくなかったんです!

「つ…ごめんつ、なつ…!!」

本当にごめんなっ…!!」

コウは彼女の抱えた不安を改めて突き付けられ、
たまらずヒビキを抱きしめた。

「なあっ、ヒビキい…」

まだ、こんな私を姉ちゃんって呼んでくれるなら…

また：チャン、スくれるかな？」

涙声に震えながらもコウは響きの頭を撫でて尋ねる。

その所作は本当の姉妹にも親子にも見えた。

コウの胸の中で感極まって震えて泣いているヒビキ。

彼女は言葉を出せずに、只首を静かに縦に振った。

その様子を三人は涙ぐみながらじつと見ていた。

「すいません、見苦しい所を見せちゃいました」

「ううん、いいのよ？」

ヒビキちゃんたちには必要なことだったんだから」

泣きはらした瞳をヒビキは苦笑に歪めた。

そんな彼女にりんは優しく言う。

コウはヒビキに向き直って笑みを浮かべる。

「お互い避けててまだ言ってなかったな。

就職おめでどうヒビキ」

「はいっ、姉さん」

自らも泣きはらした目だったがコウは笑顔を浮かべてそう言った。

それにヒビキも笑顔で応える。

「私からも姉さんに一言…？？イイ？」

「ん？何だよ？」

おかえり、姉さん

っ、あつ、ああ…！ただいまっ！ヒビキっ！

自分を迎えてくれる言葉に、コウの胸に暖かい痛みが走る。
再び彼女の目に涙が溢れてくる。

「本当に良かったですね。

八神さんにヒビキちゃん…」

「はいっ、私もちよつと泣きそうです」

青葉と紅葉は目の淵に涙を浮かべて微笑んでいる。

りんは指先で瞳を拭い二人を見つめていた。

「姉さん、良い後輩と後継者に恵まれたんですね」

コウから離れて青葉と紅葉を見つめ言った。

「ああ…これからの奴らだよ。

この会社を担う次世代の人材さ」

「ええ!?」

「そんな勿体ない言葉ですよっ！」

「そっ、そうですっ！」

私の方はまだインターンですしっ」

コウが笑みを浮かべてヒビキに二人にそう紹介した。

ヒビキは青葉と紅葉のそんな様子がおかしくてクスクス笑った。

「それは期待大だね。

二人が居ればあつという間に売り上げ黒字間違いなしですネ」

「ああ、後は二人が盛り上げてくれる。んでっ、私はただただら過ごすっ
！」

「ヒビキちゃん、ハードルを上げないでくださいっ!!」

「そうですっ、というか八神さんも何、ダメな方に乗っかってるんです
か!？」

青葉と紅葉の焦ったりアクションにコウとヒビキはくすくすと
笑った。

ヒビキはひとしきり笑うと、りんの方に目を向けた。

「遠山さん…」

「?何かしら?ヒビキちゃん…?」

ヒビキはりんになづくくとゆっくり上体を…頭を下げた。

「姉さんの事、有難うございます。」

貴女のお陰で再び姉さんに会う事が出来ましタ。

そんなつもりはなかったんでしようガ…

姉さんの傍にいてくれて感謝しかありません」

その言葉を受け、りんは彼女の後頭部をに手を置き優しく撫でた。

「いいのよ。好きで傍にいたんだからっ、それに楽しかったわ。」

コウちゃん、貴女のお姉さんと駆け抜けた七年間は」

優しい音色でそう言いりんは言う。

ゆっくりと彼女は頭を上げるとヒビキは救われたような笑みを向けた。

「何となくですけど姉さんが立ち直った理由が分かった気がします」

「ふふっ、褒め言葉としてとっておくわね」

二人のやり取りにコウは照れるように気まづげに頬を書いて目をそらした。

「とりあえず戻りましょうか。皆さんっ!」

「ええ、まだ残ってる作業もありますしね?ヒビキちゃん」

青葉は元気よく、紅葉はどこか照れくさそうにそうつぶやく。

「そうだな。じゃ、行こうか。ヒビキ、りん」

りとヒビキは静かに頷くと青葉たちと共にその場を歩いていく。

そしてこの日、

イーグルジャンプに、新しい風が吹いた。

九能ヒビキはこの後、後継者たちとの関わりの中で成長し、成長させていく。

「それはそれで間違いじゃないけどさ。 どちらかというど互いに思うところがあるって感じだよ」

あれから数日後：

キャラデザ班の三人、プログラム班のうみことねね。

そしてインターン組の二人とコウとりんがある場所に来ていた。場所はスタジオのようだ。

その場所はイーグルジャンプのモーション班の会場だった。

特殊な機材が置かれ、床に無数のコードが這っている。

大部屋であるその一角にはパソコンが置かれている。

彼女たち以外に何人かのモーション班の人たちと郷里がいた。

そしてその中央には肩や膝などに特殊な機材をつけたはじめ、

そしてヒビキが向かい合っていた。

「いやあく悪いねっ、ヒビキちゃん。」

八神さんが言うには君つてとても運動神経がいいらしいじゃない

「人並ですヨ。」

さすがにプロの方ほどじゃないです」

「あはは、そんなの私もそうだよっ！

でも、結構鍛えてるんでしょ？ だったら平気だよっ」

はじめはヒビキのことをあの後コウから聞いた。

何でも体力や機動力がかなりあるとのことだ。

はじめとしては「ならっ、ヒビキちゃんにモーションキャプチャー

やってもらおうと♪」

と軽いノリで響きは持ち掛けた。

現段階で新入りのヒビキはやるのが少ないので快く了承して今に至る。

ちなみに観客は仕事に余裕が出来たのか、見学することにした。

郷理の能力をうみこやりん、しずくが把握したのが大きい。

例年よりもずっと余裕のスケジュールに一同の心は軽かった。

ちなみにキャラハンの三人、そしてねねもモーションキャプチャー

をやったことがある。

しかし散々だったの、後学のために見ておこうと思ったのだ。

「えっト、殴られて吹っ飛ぶシーンと殴って吹っ飛ばすシーンでしたっけ」

「そうそう。じゃ、私が殴るから吹っ飛んでね」

そういうとはじめはこぶしを握って前のめりに振り下ろすように放つ。

無論、当てるつもりはなく空振りのモーションだ。

ヒビキはそれに合わせて、なんとバク転して腹から下に落ちて地に伏せた。

「うわっ！すごいっ！本当につんとんじやったみたいですよっ！」

青葉は興奮したように拳を握った。

「いい運動神経ですよっ、彼女はサバゲーをやる基礎体力は既に出てるようですよっ、

歩兵や切り込みとして動かすべきでしょうか」

「う、うみこさん」

「ねねっち…今は放っておこう」

ヒビキの身体能力に目を輝かせてシユミレートした。

部下二人は気の毒そうにヒビキを見やった。

「ははっ、すごいすごいっ！」

私も後輩に負けてられないなっ」

はじめは今度は殴られる役を担当する。

それに伴いヒビキは構えて、軽やかにステップをする。

「へえ、ボクシングやってたの？」

「はいっ、ボクササイズですよっ」

しかし、様になるフットワークに一同は見惚れた。

「はじめはさんは感性と天性でアクションをするようですが…

ヒビキさんは努力型のようなね。

基礎を忠実にという感じでしょうか」

うみこは二人の動きの傾向をそう分析する。

どちらかといえばヒビキの動きはうみこに近い。

「天性と感性のはじめさんに基礎と経験の動きのヒビキさんですか…
二人が参加してくれればサバゲーの優勝は確実ですね」
彼女には珍しく目を輝かせ生き生きと興奮気味だ。

「あは〜ん…ちよつとは落ち着きなよ」

コウは呆れた笑みを浮かべ、自分の妹分を見やった。

そして腕を構えたまま、上体をかがめヒビキは初めに近づく。

（おっ、早いっ！）

そしてヒビキは上体をかがめてアッパーの空振りを放つ。

空気が避けた音が響き、はじめは後方に大きく吹っ飛び回転してダ
ウンする。

（やるなあ…はじめさんモ…）

アッパーが自分の顎にギリギリ迫るタイミングに合わせ、吹っ飛ぶ
先輩に素直に感心した。

自分もやったがやや硬かったイメージがある。

「OKっ、ヒビキちゃんありがとっ！次は足モーション、

投げモーションどんどん行くよっ！」

「はいッ！」

二人は身体能力の限りを尽くしてモーションを読み取っていく。
時には槍や刀のレプリカを使い、鎧をまとったりした。

その一連の戦闘動作に青葉たちからの称賛の声が沸いた。

「まるでアクション映画見たいですっ！」

「ヒビキの体裁きは冴えてるな。相変わらず」

青葉の称賛にコウは笑みを浮かべてみている。

「ん〜でも、体力あるんはともかくとして…なんであそこまで動ける
んですかあ？」

ゆんは人差し指を頬にあて首をかしげる。

それはコウ以外の全員、疑問に思っていた。

「そういうえばそうだよね…」

なんでヒビキンはあんなに運動神経がいいんだろう？」

ねねははじめと殺陣をしている彼女に疑問符を浮かべた。

コウはその言葉に肩をすくめて苦笑した。

「それはね。インディーズバンドだからこそその世渡りだよ」

「コウちゃん？どういうこと？」

その言葉に親友のりんは分からず首を傾げる。

「ある程度メジャーなバンドはともかく、インディーズは一から集客しなきゃいけない。」

だから音楽以外に様々なパフォーマンスを覚えて印象に残らないとダメなんだよ。

そのパフォーマンスが笑いだったり、芸だったり、圧倒的な技術だったり」

世知辛い話だけど、音楽だけで音楽活動は難しいんだよ。

客の記憶に残るのはさ。

「成程…ヒビキちゃんは客寄せのためにそう言った芸を覚えたんですね」

ちゃんづけに抵抗を感じながらも紅葉は彼女を見つめた。

「ちなみにあいつ、中級程度の手品やジャグリングもできるぞ？」

『えええええ!』

コウの暴露に青葉たちもさすがに驚く。

「音楽で残る、記憶に刻まれることをする。」

それくらいは努力はあいつにとっては当然のことなんだよ」

その言葉にツバメは一種の尊敬に似た感情を抱いた。

「ヒビキンも必死だったんだ。」

私も見習わないとなあ…」

「そうだね。あいつは確かに新入りだけど、そこら辺の貪欲なまでの向上心、

アーティストとしてのプロ意識が一番持つてるんだよ」

そういったところが私の自慢の妹さ

「あいつを見てると分野は違えどアーティストとして負けてられない。い。」

姉としても」

そのコウの言葉に青葉たちはヒビキに視線を向けた。

青葉たちは殺陣を繰り返し、仕事をこなしていくヒビキをじっと見

つめた。

本人はちゃん付けを望んだが、その意識や心構えは自分たちよりプロ意識を孕んでるように感じた。

「八神さんとヒビキちゃんってある意味、

ライバルみたいなものなんやね」

ゆんは感心したようにそう呟くものの、コウは苦笑して呟く。

「それはそれで間違いじゃないけどさ。

どちらかというお互いに思うところがあるって感じだよ」

それにライバルは多分、これから出てくるさ。

コウはそう言うのと青葉と紅葉を見た。

「やつ、八神さんっ!？」

もしかして私たちですかっ!？」

「何か、恐れ多いですよっ、もうほんとにっ」

「おいおい、何言ってるんだよ？」

私を超えないと夢は叶わないんだぞー」

弱気な二人に近づき両手で拳を作り、

ぐりぐりと二人の頭を拳で擦る。

「いたっ、いたたたっ……」

「痛いですよっ、八神さん」

二人のリアクションを面白げに見ると目を離し、

郷理に目を向けた。

「……………」

コウは郷理に近づき、彼女の頭を撫でた。

「ごめん、今まで会いに来なくてさ。

はじめとヒビキの作業が終わったら私のデスクに来てよ」

お姉ちゃんから七年越しの贈り物があるんだ。

「……………」

そのことばにさとりはこっくりと頷いた。

彼女の過去を知るコウはその様子に胸が締め付けられる。

しかし、無理に笑って彼女の頭を撫でた。

「コウちゃん…」

「八神さん…」

りんと青葉はその様子を見守るしかできなかつた。

そしてその作業が終わった後、

はじめははしゃぐようにヒビキに抱きついた。

「凄いつ、凄いつ！」

今回のモーシヨンはすつごく良いのとれた気がするっ！

モーシヨン班の皆も満足してるしっ、言う事なしだよっ！」

「ハハッ、お役に立てたなら良かったです。

私も久々に動き回れて楽しかったですシ」

抱きついてくるはじめを受け止めて、

ゆっくりと引き離して笑いかける。

「次回もまたよろしくねッ！ヒビキちゃんっ」

「あーはいはい。」

はじめえ、ヒビキちゃんテンションに付いてかれんようになりそう

やん。

先輩なんやからちつと落ち着きい」

元気良く絡むはじめを嗜めるよう、

ゆんは呆れながら溜息を吐く。

「大丈夫ですヨ。」

それに元気に構ってくれる方が私的に助かりますから」

ゆんに肩をすくめて笑顔で言う。

しかし、その意味や真意をゆん達は知っているので重く感じる。

「いや、大丈夫ですからッ、私たちの事で落ち込まないでくださいッ

！」

ゆんはその一言を強がりと感じたのか、

ヒビキの手をとってうるうるを見上げる。

「大丈夫やでえっ、うちが常に気を掛けて構ったるからなあ」

「うん、私もヒビキちゃんに構い倒すからねっ！」

先輩二人の熱すぎる抱擁にたじろぎながらもヒビキは満更でもないのか、

困った笑みを浮かべて受け入れていた。

ヒビキ的には周りの暖かな視線が辛かったが、

もう諦めた。

「えっと、郷理とねえ…八神さんハ？」

「普通に姉さんと呼んでもいいんだよ？」

むしろ私も君みたいな子にお姉さんと呼んでもらいたいね」

うみこはしずくの一言にエアガンを構える。

「つと、おふぎけはそれくらいにして。」

二人ならキャラハンのブースに向かったよ。

七年越しのプレゼントとか言ってたね」

「あー…だったら、こっちも渡したいモノを渡しときますかネ」

その言葉にひふみは思い出したように風呂敷に巻かれた何か、

それを両手に持ってきたのを思い出した。

「何か…持ってきていた、ね？」

何を持ってきていたの？」

「んー、特定の人以外には余り意味がないものですネ。」

大したモノじゃないですが…青葉ちゃんや紅葉ちゃんには宝にな

るでしょうネ」

青葉と紅葉を見てヒビキはそう言う。

「私たちにとってはいいモノですか？」

「ちよっと、想像できませんね」

二人もヒビキの持ってきたものに興味はあったので、

聞き返すが彼女は含むように笑む。

「あーでもっ、これ姉さんには内緒にしておきたいんですよ。」

取り上げられそうですシ」

その一言に一同はざわついた。

最初に食いついたのはりんだった。

「ちよっと、ヒビキちゃんっ!？」

何を二人に上げるつもりなのっ!？」

「?んー…ちよつと秘密ですネ。」

二人には姉さんの件で手伝ってもらったのデ、プレゼントですヨ」
その言葉に青葉と紅葉は恐縮してしまう。

「そつ、そんなに気を遣わなくてもいいんですよ？」

大した事なんてしてないんですし」

「はいっ、私たちはそうしたいと思っただけなんです」

「なら、言葉を変えて…私が持っただけでもないモノなのデ、
多分、上手く使ってくれるのが二人なんじゃないかなと思っただ
んで」

その言葉に意味が分からなかったが、

二人にとっては良いものらしく、ヒビキには意味がないものらし
い。

「んー、分かりました。」

とりあえず見てから考えます」

「このまま拒否するのも、ちよつと失礼な気がしますしね」

とりあえず青葉、紅葉は了承した。

そしてヒビキから貰うモノが言葉の通りのモノだと知ることにな
る。

そしてとりあえず一行は少し先にでたコウを追うようにブースに
足を運んで行った。

「大事にする、ね?…お姉、ちゃん」

モーションのふたりがそろそろ終わる作業の頃合を見計らい、コウは郷里の手を引いてキャラハンブースに戻っていた。

そして少し散らかったテーブルを簡単に片付け、引出しを引いた。

その中には彼女が書いたであろうラフ画があった。

フェアリーズストーリーのキャラの絵だ。

バツテンやリテイクという文字がキャラの周りを埋め尽くしていたが、

決定稿の版が押されたキャラがいた。

そのキャラはフェアリーズストーリーの現・カレンというキャラだった。

「約束だったな。」

お前と兄さんをゲームに必ず出すつてさ」

コウはラフ画を困ったように、

それでいて万感の思いを込めた笑みで笑った。

「…せめてこんな形でも出したかったんだよ。」

ちなみにナイトやコナーは清太郎を参考にしてるんだ」

その紙を受け取り郷里は確認するように呟く。

相変わらず無表情のまま、自分と似ていて自分より表情豊かな分身を見る。

そんな彼女を見つめるコウの表情はとても優しかった。

「私は…覚えてない…記憶はある…けど、どう思ったか思い出せない、

でも…この絵が好きだってことだけは、わかる…よ?」

しかし、郷里の目から透明に光るものが流れていく。

「あれっ…なんで…涙が…」

自分がどうして震えてるのか分からない。

そしてどうして泣いてるのかも分からず郷里は困惑した。

コウは郷里にゆつくりと近づき、強く抱きしめた。

「ちゃんと深いところで覚えててくれてるからだよ。」

郷里？お前は妹で大事なファン一号だよ」

彼女の頭を撫で優しく囁く。

郷里はコウの肩に顔をうずめこくりと頷いた。

「アリガトな？郷里、私なんかの絵を好きでいてくれて、

信じてくれて…色々、寄り道も回り道もしたけど何とかやってるんだ、私」

「こんな私にも後輩ができて、さ。

んで、昔のお前と同じものを見てる奴らがどんどん増えて…

結構、今、幸せで楽しいんだ」

コウはここ数年の自分の不器用さを振り返り、

自嘲気味だがそれでいてはつきりと強く言う。

再び郷里に会えた。

失敗も後悔もしたが妹の前で下を向くつもりはない。

只、強く誇らしげにコウは笑う。

そしてゆっくり離れるとラフ画を彼女に手渡す。

郷里は受け取る。

「大事にする、ね？…お姉、ちゃん」

「ああ、大事にしとけっ！」

涙を指先で拭いながら、郷里は静かに返した。

無表情だがその顔はどこか晴れやかに見えたのは、

コウ自身の気のせいではないだろう。

「じゃ、ヒビキやりんたちのトコに行こうか。

さとりん」

「…それ、私のこと？」

「ひふみんと同じで「ん」つけると響きがいいんだよ」

実質、コウは親しい人間の名前に「ん」のつく響きが気に入っていた。

ヒビキにも「ん」をつけるかどうか…

どうでもいいことを迷っていた。

りん、阿波根、ゆん、あたり割とコウにとっては何故か好きな響き

だ。

「わかった、じゃそれで…」

特に、本当に特に思うこともなく郷里は了承した。

「じゃ、行くうか。さとりん」

「ちよつと、遠山さん…ぽいね…お姉ちゃん」

どうでもいい返答をして郷里はコウについていった。

そのやり取りを聞いていたのか、ヒビキたち三人が見計らうように出てきた。

先程までのやりとりを聞いていたのか、見守るように優しい笑みだ。

「姉さん、どうでもいいこだわりがあるよネ。

うみこさんを阿波根つて呼ぶあたり何というカ」

「んーでも、私もあおばんとか八神さんに呼ばれます」

「何か青い番長みたいですネ」

羨ましそうに青葉はそう言うが紅葉にそうつつこまれ、

若干シヨックを受けた。

「個人的に番長ではなくても、東大の赤本みたいですネ」

「あー、ちよつと分かります。専門用語っぽいつていうか」

あおばんの響きを真面目に考える二人。

その二人の真面目なボケに居た堪れなくなったのか、

顔を真っ赤にして青葉は反論する。

「二人はヒビキンやもみじんでいいですよねっ、

私より響きが可愛くてっ！」

「いや、でも…漢字を想像するとヒビ禁とかもみ神とカ…」

「ヒビキちゃん、なぜその漢字をチョイスしたんですか」

そう紅葉に突っ込まれつつ、本題を切り出そうとわざとらしく咳をする。

「さて、じゃあ姉さんがいない間にちやっちやと済ませましょうカ」

そう言う自分のデスクの下にある風呂敷包のそれを机に置く。

「紅葉ちゃんにはこつちを…青葉ちゃんにはこつちですネ」

ヒビキは二人にそれを手渡す。

受け取ったふたりはやはり興味があるのか、何うように彼女を見た。

「へっへっへっへっ、これがその例のブツですか、お代官様」

「なんで悪代官のノリなんですか」

下衆な笑みを浮かべて揉み手をする青葉、

それに律儀に突っ込む紅葉。

この二人、いいコンビだなあと思いつつヒビキは苦笑する。

「とりあえず開けてみてヨ。」

私のいう意味が分かると思うんデ」

「はいっ、風呂敷の中身はなんじやろなあ〜っ」と

（青葉さん、ノリがいちいち古いです…）

（言葉のチョイスが何か面白いネ…うん）

彼女自身、無意識の言葉のチョイスを内心だけに止め二人は突っ込む。

二人は風呂敷をとくと中には無数の紙の束が出てきた。

「うわ…紙…画用紙…自由帳…」

「漫画用の原稿用紙もありますね…それも全部、落書きが踊ってますね」

様々な種類の紙の束に鉛筆やインクの線が奔る落書きが書き込まれていた。

二人はこの落書きが何の意味があるか分からず、混乱した。

「あの、ヒビキちゃん。」

コレってなんですか？」

「だれかの落書きということはわかります。

線のラインから見ると私のトコの落書きと

青葉さんの落書きは違う人が描いてるみたいですが」

青葉は素直に紅葉は分析するように当然の疑問をぶつけた。

その疑問を待っていたかのようにヒビキは微笑む。

「そう、落書きだヨ。」

紅葉ちゃんに渡したのは、姉さんの昔の落書き、

青葉ちゃんに渡したのは姉さんの先輩とも言える兄さんの落書き

だヨ」

その内容に思わず二人は驚く。

しかし、構わずヒビキは続ける。

「ふたりの絵のルーツがこの落書きにはあるんだヨ。

他の人たちにはともかく、君たちにとっては非常に価値のあるもの
と思っただけド？」

ヒビキの言葉に二人は目をキラキラさせて彼の両手をそれぞれ取る。

「ありがとうございますっ！」

確かにこれは宝物ですっ！

八神さんに負けないようなデザインを勉強しますっ！」

「憧れの人の歴史…」

気分が高揚しますね、これは…ありがとうございますっ！

「参考にさせていただきますねっ」

「例を言われるほどじゃないヨ…」

実家の倉庫に腐るほどあるから、整理の意味も込めテ…だからネ」

「でもいいんですか？」

八神さんはともかく、お兄さんのは形見なんじゃ…」

「だからこそ、カナ…」

今の郷里や畑違いの私が抱えても兄さんの技術は死ぬだけだし…

それにpecoのキャラデザの事は聞きました…

だったら、青葉ちゃんが持っていたほうがいいでしょう？」

「ヒビキちゃん…」

青葉はヒビキの言葉に感極まったように笑みを浮かべ、

瞳に涙を浮かべた。

紅葉は時期的にその意味は分からなかったが、

青葉が何か悔しさを抱えてるような気がした。

「紅葉ちゃんには姉さんの事をもっと知る方が良いかもしれないか
ラ、

そつちを渡しました。でも姉さんには秘密ですヨ？」

「?..どうしてですか？」

落書きですけど、これでも結構うまいですよ?」

「いや、恥ずかしかつて取り上げようとすると思うのデ」

紅葉の疑問にヒビキは硬い笑みを浮かべ、そう答えた。

青葉は納得したように頷く。

「分かりますっ!八神さん、がさつでズボラなのにそこら辺、変に照れ屋ですよね」

「今の姉さん、パンツ一丁で会社に泊まってるとはしずくさんに聞きましタ」

「ええっ!?そんなんですか!?

インタビュ어의写真が儂げで綺麗な感じだったんで意外ですっ」

「ちなみに昔の姉さんは滝本さんに近い感じの人でしたヨ。

パンツ一丁も流石になかったですシ」

「おおー、そうなんですかっ!」

他には他にはっ?」

「私も知りたいですっ!お願いしますっ!」

そして三人は八神コウ談義に花を咲かせた。

その会話はキャラハンの三人が来るまで続いた。

そして後日、

口を滑らせた二人に自分の過去の暴露話をされたと知ったコウは、凄まじい形相でヒビキに詰め寄る。

しかし、それを見越し彼女はプログラム、

モーション班にヘルプとして避難したそうナ。

「コミュ障も突っ切るとコミュ強になるんやな」

現在、九能ヒビキはプログラム班のヘルプとしてデスクに向かって
いる。

バグ報告作業の補助していた。

「分かってはいましたガ、

やはりとうかきついですネ」

「ふっふっふ、ヒビキん。

私たちの苦勞を分かってくれたかい？

さあ、敬うのだよ」

それなりに集中力を要する作業であるデバッグ。

若干、嫌気がさした頃にヒビキは何とはなしに呟く。

彼が今ここにいるのワケがある。

郷里の行動限界の回避のためにヒビキはしずくの命でここに回っ
てきたのだ。

二時間で大半の作業を終わらせる郷里のサヴァン能力は貴重だが、
余りそれに頼るのをしずく自身が良しとしなかったのだろう。

何より前日のコウの過去の暴露。

それが青葉たちから流出したのが大きい。

そそくさとしずくに談判を申込みヘルプに来ていたのだ。

コウに仕事を頼んで、小言を回避させた。

今、コウはぶつくさと文句を言いながらブースで絵を描き殴ってい
た。

そして郷里の状況に話は戻す。

しずくが言うには彼女のそれは方が一の切り札にしておく方がい
い。

それがうみことりんと共に決めた言葉だった。

今、彼女は欠落した感情のリハビリのためコミュニケーションを兼
ねて、

休憩中のキャラ班のもとに向かっている。

「ねねっち、そのキャラなのさ。」

でもイイ方向に向かつてるんじゃない？

さとりん、別に悪い子でもないし」

胸を張るねねに苦笑を浮かべてキーボードを打つツバメ。

彼女はにやつとした表情でヒビキに問う。

「まあ、そうなんですけどネ。

あッ、今、青葉ちゃんとはじめさんとゆんさん抜けてるんですけどケ？

残ってるのって紅葉ちゃん、橋本さんと…

キャラハンブースにお邪魔してる郷里ですか？」

ヒビキはふと青葉たちが所用で抜ける事をコウにしていた事を思い出した。

自分もその近くにいたので、見つからぬよう忍び足で帰ってきたのだが…。

「でもさー、さとつちとあの二人って…」

「どんな会話するのか謎だよネ。

ももと滝本先輩とさとりんって」

二人の言葉を横に聞きながらヒビキは在る懸念をしていた。

(あの二人、「在る」方だから暴走してないといいけど)

此処に来る前に嚴重に注意しておいた妹の『何か』を思うと溜息を吐かずには居られなかった。

一応、二人とうみこにも離しておいた方がいいだろう、

そう思いネネとツバメに伝えることにした。

「あー…二人は率先して関わってくれるから、基本的に無事でしたけど…」

心配事が在るんデ話しておいていいですか？」

「ん？…どういうこと？」

ねねはそう言いツバメは疑問符を浮かべてヒビキを見る。

「郷理の悪い癖の話ですネ。

こればかりは7年前と同じでしたしネ」

肩をすくめてヒビキはとにかく口を開いた。

「……………」
「……………」
「……………」

青葉とゆんとはじめは所用で席を空けて戻ってきたとき、
謎の混沌とした空間が三人にあった。

「えつと…これって」

「あつ、あー…会話が続かんかったんやなあ〜」

「いや、でもこの沈黙重すぎるでしょ!？」

葬式みたいなテンションだよ!？」

暗黒の沈黙空間と化したキャラ班ブース。

そこに墮とされた（もしくは自ら墮ちた）可憐な年若い乙女たち。

滝本ひふみは涙を浮かべて縋るように三人を見た。

「……………ひふみ先輩…」

青葉はがっくりとしたように肩を落として溜息を吐く。

最近は改善したと思っていたが、自分を遥かに超えるコミュ障の郷
里。

彼女には勝てなかったようだ。

（いや、コミュ障で勝っちゃダメですけどっ!）

望月紅葉は冷や汗と硬い表情で目線を彷徨わせて三人を見た。

「もっ、紅葉ちゃん。」

きっかけ掴めなかったんだね」

はじめはこの沈黙空間に放り込まれた彼女に素直に称賛を送ろう
と思った。

この三人の中で比較的、話しやすいのがたぶん彼女だ。
初対面のとっつきにくささえ除けば、基本感性は自分たちに近い。

彼女は静かだが気が強いのだ。

気が強いというのは主張したいという意味の表れだ。

おそらく彼女も先導して話題を振ったのだろうが…。

まだ前よりはマシとはいえ、メールでの会話が主なひふみ。

そしてそれ以前の郷里という空間にいて、げんなりとした表情を浮かべた。

「しっかし、郷里ちゃんは通常運転みたいやな…

コミュ障も突っ切るとコミュ強になるんやな」

「いや、コミュ強ってなんですかつ?!」

ゆんは感心したようにそういうが、

青葉は切羽詰まったようにツツコミを入れる。

「……………」

郷里はゆんと青葉の話の意味に小首をかしげる。

はじめはそんな彼女を見てあははと笑うだけだった。

「あーもうっ、こっようなったら郷里ちゃんと親しくするにはまずっ、

彼女の好きなものを聞いてみましょうよっ!」

「うん…そう、だねっ」

青葉の勢い任せの提案にひふみは安心したように頷き微笑む。

紅葉も若干、助かったような安堵の表情を浮かべたが…

「あの、青葉さん…それ、私も聞きましたけど…

答えてくれませんでした…」

「そうなの? 郷里ちゃん?」

はじめの疑問を頷き、悟りは肯定する。

「ん、何でなん?」

話題が広がるかもしれないやん?」

笑みを浮かべて優しくゆんは聞く。

郷里は無表情のまままでこう答えた。

「ヒビキおねーちゃんが、あまり私の好きなものは言わないほうがいいって…

夢中になって迷惑がかかるし、失礼だからって…」

辿たどしいが今までと違って若干、流暢な言葉遣いだ。

しかし、内容からしてヒビキが彼女をそう注意してるようだ。

「ヒビキちゃんが？」

郷里ちゃん、ええ子やん…なんで注意したんやろ？」

「迷惑がかかるって私たちに？」

はじめは目線を合わせて尋ねると、こつくりと彼女は頷く。

「でもっ、そんなことわからないじゃないですかっ！」

ヒビキちゃんには悪いけどとりあえず聞いてみましょうよっ！」

青葉も困惑しながら、提案する。

ひふみたちも異存はないのか、頷き彼女を見る。

「郷里ちゃん、とりあえず言ってみてください。」

「私たちはあなたを迷惑とは思いませんから」

紅葉は真剣な目で真っ直ぐ彼女を見つめた。

郷里は数秒固まったあと、こつくりと頷いた。

「じゃ、言うね。私の好きなのは…」

こつくり、と一同の喉がなった。

「おっきな…おっぱい、かな」

びし。

青葉たちは固まった。

おっきなおっぱい？おっぱいって女性の胸部装甲のこと？ why？

一同の頭の中によぎったのはそんな疑問の嵐だった。

「…私ないから、人を見てるとつい触りたくなるの…」

寝るときはお姉ちゃん、ヒビキちゃんのおっぱいにうずくまって寝てる…

やらかくて、あつたかくて気持ちいんだよね」

辿たどしいのにどこか熱さを帯びた情熱。

それが言葉から伝わってきた。

「ちよ、なんやのっ!？」

乙女に有るまじき情熱や熱量を感じるでっ!？」

「…これ、は…よ、予想外、だね」

「予想外どころか論外すぎるよっ…!」

確かにこれはヒビキちゃんが止めるよっ!!？」

「あの、聞いてしまった以上どうすればいいんでしょうか…?」

「今回ほど、自分の前向きさを呪ったことはないですっ」

五人は円陣をその場で組んでそんな会話を小声で話した。

しかし、郷里は察することも空気を読むこともせず続ける。

「はじめさん、紅葉さん、ひふみさんを見てて…そのずっと触りたい、揉みたいと思ってたの」

淡々とした冷徹な口調で郷里はそんな事を暴露した。

暴露されたターゲット三人は顔を真っ赤にして固まる。

「いやいやいやっ、何を言ってるのさ!？」

郷里ちゃん!？」

「そっ、そうですよっ！

大体、同性の胸なんて面白くないでしょうっ!？」

「だって、私にはないし…妬むよりは愛でたいと思うから…ね?…」
と言いながらゆんと青葉に目線を向けた。

「郷里ちゃんっ!うちと青葉ちゃんを見んといてっ!

悲しなるわっ!!」

「そうですよっ!巨乳なんて挽げればいいんですよっ!」

青葉のその暴露にひふみはびくつと震えた。

「つつ、ひくつ…ぐすつ、あ、青葉ちゃ…ん、ごめんね…その…」

「っ!?!いえいえいえっ!!」

ひふみ先輩のことじゃなくてっ…!」

青葉にそう言われて涙を浮かべて謝るひふみ。

青葉はそんなひふみをおろおろと説得し始める。

「二人共大丈夫…ヒビキちゃんよりは無くても…」

「コウちゃんよりはあるから」

「いやいやいやっ、二人にとってはどうでもいい情報だからねっ!？」

それっ!？」

はじめはその訳のわからないフォローに全力でツツコミを入れる。

一番の被害は妹2号にそんな情報をぶちまけられたコウ自身だろうが…。

「…で、私の好きなものを話したけど…触らせたり、揉ませたり、

埋めさせてくれるんですよ、ね?」

無表情ながら真剣な目でじーつと郷里は見つめる。

はじめとひふみと紅葉はその視線にうっとたじろぐ。

助けを求めるように対象外の二人を対象者たちは見るが…。

「まあ、頑張りや…うん」

「はじめ先輩、ひふみ先輩、紅葉ちゃん…ファイトですっ!」

そしてキャラハンのブースは甘い百合の香りに心なしか包まれた。

数十分後。

顔を真っ赤にしながら息を整え、

椅子にぐったり座る三人の姿があった。

青葉とゆんは顔を真っ赤にしている。

「ふう…」

郷里はどこかつやつやとした無表情でそう言った。

はじめもひふみも紅葉も顔を真っ赤にして小さく吐息を繰り返している。

青葉とゆんは顔を真っ赤にしながら、その光景を見ているだけだった。

「っ…はあ…はあ…」

郷里さんはなんでそんなに上手いで…っ!？」

紅葉は自分がとんでもない事を口走りそうになり、顔を真っ赤にして口を噤んだ。

「ううう…」

自分の両胸を守るように抱いて、目に涙を浮かべて小刻みに震えるひふみ。

その涙は拒否や嫌悪というよりは艶を帯びていて…

(癖に成っちゃダメだっ!駄目だぞっ、ひふみっ!)

何かに抗うように戦う彼女が居た。

「郷里っ、ちゃあん…酷いよオ…」

郷里の指技にいつものボーイッシュユで快活な彼女…

はじめの雰囲気は、切なげな吐息と濡れた目で雲散霧消しており、

青葉とゆんにぞくぞくするような興奮を与えている。

「さっ、郷里ちゃん。」

てっ、テクニシャンすぎるやろく…」

「うううく…今夜帰つても眠れないかもしれないかもしれませんっ」

両手を顔に当ててゆんは顔を振る。

青葉は目を閉じて深呼吸をして興奮を落ちつけようとしていた。

一方、その頃。

「えええっ!？」

さとりんっておっぱい星人なの!？」

ねねは困惑したように声を上げてヒビキに尋ねる。

ツバメはその言葉を聞いて、若干引き攣った笑みを浮かべていた。

「しかし、女性の胸なんて脂肪のようなものでしょう？」

柔らかさ、形、大きさに違いはあれど同性が惹かれるものとは…」

所用から戻ってきたうみこが合流したところで四人は休憩時間に入っており、

郷里の好きなモノに関しての注意をヒビキは語っていた。

「自分より大きいものに関して憧れるって言っていましたネ。」

そこら辺は昔から変わってませんが、むしろそこら辺だけは消えて

ほしかったでス」

遠い目をしながら、ヒビキは天井を見た。

「でも、私たち触らせてとか言われた事なんかないけど…」

少なくともねねもツバメもうみこも郷里よりはある方だ。

しかし、迫られた事はない。

「まあ、私が注意しましたからね。」

それに二人とも外向的じゃないですか？

好きなモノを聞かなくても話題を提供してくれるという力…」

だから、その話題に今まで触れずに済んでるという力…」

「成るほど、でも滝本さんや紅葉さんだと…」

その話題が出るかも、と」

うみこは納得したように顎に指先を当ててふむと考える。

「ないとは思いたいけど、餌食になる確率も半々かなア…つテ…

青葉ちゃんやゆんさんは大丈夫だと思いますけど…」

「ヒビキン、それちよつと地味に二人に酷いよ」

ねねは冷汗を垂らして半笑いで突っ込み、

ツバメは今日の夕飯はちよつと奮発してあげようと思うのだった。

そして郷里はこの日をきっかけに巨乳キラのサヴァンという二つ名を手に入れた。

翌日、ヒビキは菓子折を買って巨乳組みに頭を下げたのは言うまでもない。

「ヒビツ、キッ、ちや…何でちよつとキレてっ…!んですかっ」

「そういえばまだ、ヒビキくんの新入社員歓迎会をやってなかったね?」

しずくは思いついたように定時終わりに呟いた。

キャラハンのブースに来ている彼女の言葉に一同は振り返る。

作業がひと段落したあと青葉たちは茶菓子を嗜んでいた。

彼女たちは思い出したように椅子に座っているヒビキに一同は目をやった。

「いや、それなら紅葉ちゃんも、鳴海さん、ねねちゃん、

郷理もそうなんでハ?」

「何を言ってるんだい?ヒビキくん?」

二人はインターンで桜くんと郷里くんは契約社員だよ?

望月くんと成海くんは内定をとってるけど、君は既に社員だろう」

「えっ、私は既に合格してるんですか?」

紅葉はその言葉に驚きながらしずくに尋ねる。

「そうだよ。」

八神の奴、報告してなかったのか」

しずくは彼女のルーズさに苦笑を浮かべて肩をすくめた。

紅葉は青葉が言っていた「いい加減な人」という言葉を改めて思い知った。

「でも、なんで忘れてたんだろうね?」

最初から採用で働いてたのにね、ヒビキちゃん」

はじめは新入社員恒例の歓迎会を今回に限って忘れてた事、

それに若干の困惑を現す。

「あっ、そういえばそうですよね?」

なんで忘れてたんでしょう?」

「いや、ヒビキちゃんの動機や八神さんの関係とか色々あったからちやう?」

「あと…さと、りちやんの好きなもの、とか？」

「あー、インパクトありましたからねえ、あれは」

ヒビキの志望動機、九能姉妹の過去、八神コウとの関係もさる事ながら、

そんなシリアスな理由もぶつ飛ぶほどの郷里の好きなもの…。

歓迎会以前に話題に事欠かない事実があったのだから仕方ないかもしれない。

「あのっ、滝本さんもはじめさんも紅葉ちゃんもすいません」

気まづげに笑みを浮かべてヒビキは三人に言う。

「ううんっ、大丈夫だよっ！」

ちよつと恥ずかしかつたけどっ、地雷を踏んだの私たちだしっ」

「そう、それにちよつとだけ…その…

あううく…」

はじめのフォローに続くようにひふみも何か言おうとしたが、

あの時の感触に焦がれかけていて、赤面しながら顔を手で隠した。

「滝本さん、ふあ、ファイトですっ」

紅葉も洗礼を受けた手前、何を考えてるか嫌でも分ってしまったている。

「あーもうっ、三人とも変な空間になってんでっ!!

もつとしつかり気を持つてえやあ」

さすがにあの空気の再来は遠慮したいのか、

ゆんは振り払うように突っ込む。

「でも、相手にされなかつたらされなかつたですんごいショックですよね」

「そういう意味でも何かスイマセン」

青葉のあきらめたような遠い目、

そんな彼女に固い笑みを浮かべてヒビキは謝るしかなかった。

「?おや、何か郷里くんが愉快なことをしたのかな?」

その現場を見ていないしづくは気楽な感じで尋ねる。

「まあ、うちの妹は今も昔も愉快って話ですヨ」

遠い目を浮かべて乾いた笑みをヒビキは浮かべた。

しずくは分からなかったが、なにか面白そうなことがあったのだけは察せた。

「多分、近いうちに厄介になると思うんデ…」

正直、あんまり説明したくないでス」

「ふむ、そうかい？」

なら、それを待たせてもらおうとするかな」

余り、自分の妹をおっぱい星人という説明を何度もしたくないので、

強引にヒビキは話を終わらせた。

一同も納得したのか、苦笑を浮かべている。

恐らく、しずくにも郷里は突貫すると満場一致で思ったのもある。

「んー、じゃ…ちよつとそれまでにパワポでなにか作っていいですかネ？」

ヒビキはニヤリと微笑むと何かを企むようにあご先に指を当てる。

「おや、何かやりたいことがあるのかい？」

「大したことじゃありません。」

歓迎会って事なら私もちよつと一芸を仕込もうと思ったんですヨ」

「？ヒビキちゃん、何かやるん？」

「ええ、どうせならちよつとした一人コントのスライドショーを作ろうかト。」

そしてイーグルジャンプに入った意気込みでモ…」

「ふむ、そういうことなら構わないよ。」

いつものメンツでいいね？」

「ハイ、ああ、うみこさんにちよつと伝えておいて欲しいんですけど…」

多分、全員が爆笑すると思うんデその時、姉さんを押さえ込んで欲しいんでス」

「ええ!? そんなにハードル上げて大丈夫なのっ!？」

というか、なんで八神さんが出てくるのっ!？」

「秘密でス」

ヒビキのどこか不敵に満ちた表情に一同は興味を覚えてその作業を許可したのだ。

そして、数十分後。

会議室にお菓子を持込み、パイプ椅子に座るキャラハン、プログラム、

モーション、その他のメンバー。

そして机の上にパソコンを置き、ホワイトボードに映像が映るよう
に設置したヒビキ。

彼女は青葉たちに向かい合うように立っている。

「ハイ。」

暇な時間を使ってここに来て下さり感謝してマス。

一寸、時間もあつたので改めてこの会社に対する私の意気込みを語
りたいと思います」

やや神妙めいた口調でヒビキは青葉たちに語る。

その空気だけ何か笑えてきた。

「ヒビキちゃん、お笑い好きなんかなあ〜」

「というより、笑いを取りに行くのが好きって感じがしますね」

「なになになにく、ヒビキん、面白そうなことするの〜」

「何かもう、入りがちよつと芸人っぽい空気があるよね」

ゆん、青葉、ねね、ツバメの言葉を受けてヒビキは少しだけ目を向
ける。

「でも、まず私と郷里の簡単な歴史とちよつとだけ紹介しますネ。

何事も原点は大事なのデ」

そしてマウスをして画像が出てくる。

それは幼いヒビキと郷里たちの写真だ。

7、8歳くらいの小さい女の子二人と、中学生くらいの少年が中よ
さげに写っている。

そのふたりは恐らく郷里とヒビキだろう。

後ろにいる少年は兄である清次郎…コウの元彼のようだ。

「ハイ、私と郷里と兄さんの写真です」

「お兄さん、かつこいいじやないですかっ!!」

青葉は清次郎の写真を見て思わず感想を述べた。

一同もそう思ったのか、その後ニヤついた笑みでコウを見つめた。

「ちよつとつ、なんで私を見るんだよっ!!」

「いや、だって…彼女さんですし」

コウは妙な羞恥心を感じ、辟易とした態度でみんなに言う。

しかし、はじめの最もな言葉に何も言えなかった。

「大体、この時には兄と郷里は絵を書いてました。

私は音楽を初めて一、二年くらいの頃ですネ。

この辺りですかネ、姉さんが関わってきた時期ハ」

訥々と思り返すように語るヒビキ。

どこかしんみりとした空気があたりを支配したところで、

次の写真をスライドで写した。

今度は中学生くらいのコウを含めた四人で写真に写っていた。

郷里とヒビキを満面の笑みでしゃがみ込み、

二人を背中から抱きしめている。

「八神さん、めっちゃ笑顔じゃないですか!!」

「くっ!!ヒビキっ、なんでこの写真をチョイスしたんだよっ!!」

中学くらいのあどけない表情の自分の笑顔をメンバーにさらされたコウ。

彼女は生暖かくニヤつく視線を居心地悪げに受け止めていた。

「いや、だって原点になった人なんですから姉さんは外せません。

それとも本当はやっぱり来て欲しくなかつたんですか?」

どこかじわあと涙目を浮かべる妹。

その様子にうつとコウは詰まる。

「いけませんね。八神さん…ちゃんと妹さんを大事にしないと」

諫めるように言うがうみこは半笑いだった。

うみことヒビキを恨めしげに睨みながらも、

勝ち目はないと感じたのか溜息を吐いた。

「わかったよっ、大丈夫だよっ!!」

だからっ、さっさと次行つてっ!!」

コウはヤケになりながら叫ぶ。

ヒビキはその言葉にケロツとした表情をしていた。

「分かりましたっ！では、コレですネ」

今度は清次郎とコウが机に並んで座って絵を描いてる写真だ。

「ココから、姉さんと兄さんは競い合うように上手くなってくんですヨ」

青葉と紅葉はその写真をまじまじと見ていたが…

「でも、このままだとヒビキちゃんというより八神さんの歴史なんやけど」

「そうだよね!?これピンポイントに私に焦点当たってるよねっ!?!」

ゆんの困ったようなツツコミに、

被弾してるコウは切羽詰まったように、そこにいる全員に反論するように叫ぶ。

ヒビキはそのツツコミをあえてスルーした。

そして、二点三点、コウと清次郎の写真を見せた後…

スライドショーには現在のコウ…今と同じ服装のラフなコウがいた。

社員証に使われた写真のようだ。

「ん?あれ、今の八神さんだよね?」

「うん…私も、そう、思う」

いきなり脈絡なく変わった写真に疑問を一同は感じた。

「この写真何か分かりますか?」

シリアスな表情を作り重いトーンで聞こえるようにヒビキは言う。

あまりの真剣なトーンに一同はゴクリと唾を飲んだ。

「そう、この写真はですネ」

「姉さんが可愛いつていう写真でス」

「ぶっ!？」

真顔でそんなこと言うヒビキにコウは驚愕に吹き出しむせる。

青葉たちもむせたのだが、笑いをこらえきれなくって吹き出したという類だ。

「私はイーグルジャンプの就職に対する意気込みっ、語ろうとしまし
タっ！」

でも私は八神コウを姉として慕っています！

そう可愛い姉さんと居ることが私の意気込みなんです！

その言葉に今度こそ青葉たちは爆笑した。

「ちよつとっ、っ、ヒビキちやっ、何なんっ、そのっ、意気込みっ！」
「こっ、これはっ、予想外っ、だよっ!ぷっ、くっくっ」

ゆんとはじめは余りにも予想外の主張に口元や腹を押さえて笑いを堪えている。

コウは顔を真っ赤にしてぷるぷるとヒビキを睨みながら震えている。

「続いての写真はこちら!!」

写真へりんに着せられたフリフリのコウ。

「ほらっ!!可愛イツ!!（半ギレ!!）」

この時、青葉たちの腹筋が同時に死んだ。

「ヒビッ、キっ、ちや…何でちよつとキレてっ…!んですかっ」
「ヒビキン、こっ、これは流石にっ、くはっ…はっはっ!!」

青葉とねねは目に涙を浮かべてお腹を押さえて震えている。

「くっくっ…!ぷっ、けほけほっ、くくっ…」

「こっ、これはっ…くはっ…」

「けほけほ…ぷっ、くすっ…!」

ひふみ、うみこ、紅葉の無表情組もダメージあった。

その破壊力は言わずもなだらう。

「ヒビキちゃん、んっが、コウちゃんの写真、使った理由がわかったつ、わ…!ぷっ、くすくす」

「ああっ、そうかつ、こう、来たかつ、ヒビキちゃんはっ…! あっはっはっ!!」

りんとしずくも余裕なく、感想を言うだけで精いっぱいだった。

「八神っ、さんつには悪いけど…此処までやるって…!」

どんだけっ、シスコンでっ、シスコンで笑い取るのよっ…!」

律義に分析しながらも、目に涙を浮かべ笑いをこらえるツバメ。

そして次の写真をスライドさせた。

インタビュウを受けていてぎこちない表情で応えるコウの写真。

「ちよつと、堅いのも可愛いですよネ。」

姉さん乙女可愛いでス!!」

気合を入れるように低い声でそんな事を叫ぶヒビキ、

そしてやられる青葉たちの腹筋、顔を真っ赤にして目に涙をためる

コウ。

そんなやりとりを二、三回、繰り返した後…。

「以上、九能ヒビキの意気込みでしタ♪」

腹を痛めながら取り会えず、

拍手をするコウ以外のメンバー。

「面白かったよーっ、お腹痛いけどっ」

笑みが収まったはじめは額の涙を拭って言った。

「あゝ、あんだだけ笑ったん久々かもしれないわあゝ」

ゆんも涙も拭いながらヒビキを見て拍手をした。

リアクションも上々と感じたヒビキは、若干堅い笑みでこう言った。

「ではっ、私は指定された店に先に行って待ってます!」

軽く肩手を上げて、やや駆けるようにヒビキはさっさと出て行った。

「どうしたんでしょう?ヒビキちゃん?」

「青葉ちゃん、コウちゃんを見て…」

逃げるように去って行ったヒビキに青葉は疑問を浮かべるが、

ひふみは若干、緊張した面持ちでコウを見つめた。

「うがーっ!!待てええええええっ、ヒビキイいいいいっ!!!

絶対っ、許さないかなあああああああああっ!!」

羽交い絞めしたうみこの腕の中で暴れるコウ。

「ちよ、抑えて下さいっ…ぷっ、可愛いつ、八神さんっ」

「アハゴン!!お前も覚えてろおおおおおっ!!」

未だに思い返してるうみこを顔を真っ赤にして睨む。

「コウちゃん…コウちゃん」

郷里はコウに呼び掛ける。

「んっ?何さっ!今、お姉ちゃん、

ヒビキをどつくために頭の中の悪魔と契約してる最中だぞ?」

若干、不機嫌そうにしながらもコウはそんな事を言う。

しかし、妹二号の言った言葉は…

「大丈夫だよ、コウちゃんはこの中で一番可愛いから」

「もう嫌だあああああああっ!!!」

顔を真っ赤にしながらコウはその場で叫んだ。

青葉たちは郷里のトドメにまた爆笑した。

この後、先に店に行ったヒビキと合流するのだが…

腹が筋肉痛を起こして全員小食だったそうなの…

OG（オールド・ガール）01！

「んっ……こっつて……？」

鳴海ツバメは目が覚めたとき見たのは見知らぬ天井だった。

合成樹脂の天井ではなく、木目の天井。

触覚を研ぎ澄ますと、柔らかい感触がある。

どうやら布団に寝かされていたようだ。

自分の服装は昨日のまま隣には愛すべき親友もみじの顔がすぐ近くにある。

はつきりしない思考のまま起き上がると、見たことない部屋だった。

和式っぽいのだが、壁にチベット装飾の布が貼ってあった。

起き上がると紅葉の隣に郷里が寝ていた。

「えっと、こっつてじゃあ……」

「この子とヒビキの……家？」

若干、困惑するようにツバメはあたりを見回す。

自分たち三人がいる部屋の隅には中身の入ったギターケースが立てかけられている。

壁にはベースが展示されており、画鋲で楽譜が止められていた。

「あー……思い出してきた……」

苦笑気味に頭を抱えてツバメは笑う。

昨日は金曜日でヒビキの歓迎会に参加していた。

そこで二十歳になった自分は酒を飲んで倒れたのだろう。

紅葉はまだ未成年だが流れで飲んで倒れたようだ。

おそらくこの姉妹は倒れた自分たちを自宅に連れ込んでくれたのだ、

そう推察できた。

「あっちゃく、ちよつと悪いことしたかなあ〜」

「別に気にするモンでもないですヨ……」

久々の来客なのデ

ツバメの自己反省の言動に苦笑交じりにヒビキは扉を開けて現れ

た。

手にはお盆と二つのマグカップがある。

そのマグカップから湯気が出ている。

「あー、おはよっ、ヒビキン。」

「ありがとうねっ」

「いえいえ、ぐっすり眠れましたか?」

「うんっ♪」

ヒビキは彼女にマグカップを差し出して微笑む。

ツバメは笑顔で受け取り布団の上にしゃがみ込む。

「どうやらホットココアのようなだった。」

「ありがとうっ」

そしてツバメはココアを啜る。

アルコールで淀んだ体にミルクとカカオが染み込んでいく。

「あー…まだ、私にアルコールは早かったかもねえ〜」

「自覚がある分いいですよ。姉さんと遠山さんなんか凄かったんです
カラ」

昨日の宴会めいた歓迎会を思い出し、ヒビキは苦笑した。

「ははっ、あんまり覚えてないけど八神さんに結構説教されたんじゃない?」

「ええ、とはいっても酔っぱらってたので、

後半なにゆってるか全然っ、わかりませんでした」

「あれま。」

「まあ、八神さんをあそこまで弄れるのはヒビキンだけだよねえ…うん…」

「まあ、私は別に憧れの人物っていうわけではありませんからね。」

「姉妹の特権というか、そんな感じですよ」

「八神さんのファンからは羨ましがられそうだし、

「こりゃ」

「私からすれば、姉が結果的に有名になっただけなんですけどね」

ツバメはヒビキの言葉に最もだ、と納得していた。

少なくとも昔から知る人間にとっては、コウもヒビキも互いに気の

置けない関係だろう。

「まっ、それは置いて…ツバメさんっ、たぶん貴女が目覚めると思ったんで一人分だけ朝食作るときましま。

在り合わせですけど、食べといてください」

「えっ、あ…：そこまで気を使わせちゃったかー。」

でも、アリガト、頂くね。お礼はいつかするからね？」

「別にいいじゃないヨ、そんな重いモンでもありませんシ」

そういうとお盆を小脇に抱え、

ヒビキは出ていこうとする。

「ん？どっかいくの？」

「ちよつと日課の長距離ジョギングに…」

押し付けるようで悪いんですけど、郷里の事頼めますカ」

「いいよ♪まとめて紅葉の面倒も見るつもりだったし」

「さいですカ」

咲くような笑みを浮かべて答えるツバメ。

その笑みに苦笑交じりにヒビキは答える。

「あっ、ヒビキンっ！」

「何ですか？」

振り返るとツバメはどこか悪戯めいた笑みを浮かべている。

「敬語、使わなくていいからねっ」

「…ん…でもオ…」

「い…い…か…ら…ね…？」

「はい」

その言葉にツバメは満足げに頷くとよつと立ち上がる。

そして笑みを浮かべて手を差し出す。

「改めてよろしくねっ、ヒビキン」

「うん、分かったヨ。ツバメ」

そっくりヒビキはツバメの手を握り握手を交わした。

ヒビキがジャージに着替えてジョギングに行ったあと…

ツバメはテーブルに乗った料理に手を付けるため椅子に座った。

「んっ、美味しいっ」

木のテーブルに置かれた焼かれたトーストにバターとジャムを塗ったツバメ。

それを口に運ぶと笑みをこぼして感想を述べる。

特別美味しいというわけではないが、

こういう飽きない美味しさは大事だと感じている。

皿に盛られたポテトサラダとベーコンエッグも、恐らくヒビキの手作りだろう。

「ヒビキん、料理はできるタイプなんだね…」

ああ、さとつちがああの状態じゃそうなる、か」

家事が好きかどうかは置いておいて、

妹の郷里がああの状態では必然的に家事をするのはヒビキになるのは明白だった。

「他人の作った料理なんて久々ってのもあるけど、

普通に美味しい」

半熟卵の卵焼きがベーコンに絡んで、ツバメの舌を絡め楽しませている。

そんな中、不意に視線を感じた。

じー…

紅葉がジト目で朝食を食べているツバメも見ている。

「っ…びっくりしたっ、ももっ、いるなら行ってよっ…」

目玉焼き落としそうになったじゃんっ！」

「…だっつ、なるが一人だけごはん食べてるから…ずるい。

私のは作ってないの？」

「あのねえ、これ私が作ったんじゃないし…」

寝てたももにあるわけじゃないじゃん」

紅葉はツバメが作ったものだと思っていたのでわずかに驚いた。

とはいっても作った人は予想がついていた。

そもそも隣に郷里が寝ていて、自分たちの家ではないのだ。

「ヒビキちゃんが？」

「うんっ、多分、私が最初に起きるだろうからって、

今、頂いてんの」

「…ずるっ」

「いや、無茶言わないでよっ。

じゃ、ほら…」

まだ手を付けてない方の目玉焼きを箸で割って切り取ると、
紅葉の前に突き出した。

「ほらっ、ももっ、あーんっ」

「んっ、ありがとっ、なるっ、あーん」

突き出された目玉焼きを紅葉はぱくっを受け止めて食った。

半熟の君が彼女の舌に絡みついて味覚を刺激した。

「あっ、美味しい…。」

なる以外の人の初めて食べたかも」

「だよねえ…。」

ももたまには私に作ってくれても良いんだよ？」

ツバメはにやっつと口元をゆがめてさういう。

紅葉はさっつと視線をそらした。

余りにも鮮やかな視線回避でツバメは小さく嘖き出す。

「さて、じゃ…これからどうしようかなっつと」

ツバメは居間を見回してふむと腰に手を当て立ち上がる。

「とりあえず、ヒビキんが帰ってくるまでに買い物を済ませてあげ

よっか」

「?..どうして?..」

紅葉の問いにツバメはにやりと笑った。

「今度は私が持て成す番かなってねっ」

「がんばれーなるー…今日は何を作ってくれるの?..」

ツバメの言葉に期待に目を輝かせて見上げる。

「いや、ももも手伝ってよっ、

一宿一飯の恩みたいなものなんだからっ」
呆れたようにツバメは溜息を吐いた。

「そういえばさどつちはまだ寝てるの?」

「うんっ…私ねてる間に何かされてないよね?」

若干の警戒を含んだ音色で紅葉は神妙に尋ねた。

ツバメは半笑いであいまいに返すだけだ。

「いや、わかんないって…私酔ってたし…」

「だよねえ…それよりなる。」

ヒビキちゃんに言ったこと覚えてな…いか、やつぱり」

紅葉の言葉にぴたつとツバメは固まり、

冷や汗をだらだら垂らして相方を見やる。

腹が立つほどニヤついた笑みだった。

「酔ったなるがあんなにヒビキちゃんに甘えるなんてえ〜♪」

「ちよっ、私ヒビキに何したの!?!」

「何って…さつきゆったじゃん。」

めちやくちや甘えてたよ?」

「えええっ!?!」

「とはいっても、私とヒビキちゃん、郷里さん、

ひふみりーダーだけが二次会にいつてさ、

あの面白いなるの姿はみんな見てなかったけどね。」

大体が一次でダウンしたし、うみこさんも酔ってたからね」

「そっ、そうなんだ…よかった」

だんだん思い出してきたツバメは顔を真っ赤にした。

そうだ、二次会から自分は酒を飲んだんだ。

「思い出してきた?」

なるつたら自分の身の上話をしてさ、

泣きながらヒビキちゃんに抱き着くんだもん」

「わー!!わー!!」

そうだ思い出した。

旅館を継ぐ、継がないでもめた母親の話。

手伝ってくれたねねと紅葉の協力による感謝など…。

「うわあ：私っ、関係ない事を関係ない奴に話してんじゃん」
意外と迷惑の幅が出かかったことにツバメは頭を抱えた。

「でき、なる：起きたら聞こうって思ったんだけど…。」

「ナナセ？って誰なの？」

「あつちやあく私、そこまで口走ってたのかあ〜」

紅葉の疑問にがつくしと肩を落としてツバメはうなだれる。

「流石にどんな人までかは言っただけ、

なんか気になって」

この親友は見栄っ張り得意地っ張りだ。

紅葉はそれを知ってるので無理をさせないためにあえて踏み込む。
直感だが合格しても自分と違い彼女は「はい、めでたし」

で終わるとは考えにくかった。

自分を真剣に見る紅葉に自嘲気味にツバメは笑う。

（全く、ねねっちやももにはいつも心配かけるなあ〜…

今回はヒビキンにまで、か）

「じゃ、ちよつと真面目に話そつか、

といつても単純なことだけだ」

「というと…。」

「私が中学の時に旅館に泊まりに来たお客さん、かな」

で、私にやりたいようにやればいいって言ってくれた人、だよ。

「そうなんだ…」

だからプログラマーに？」

「正確にはちよつと違うけど、

あの人の関係者たちがゲームを作ってるって言ってたから…

興味持っちゃってさ」

「そう、なんだ。」

その人もゲーム関係なの？」

「ううん、音楽関係の人だった。」

よくよく考えたらさ…ヒビキンに状況が似てる気がするんだよね」

「あー、音楽関係でゲーム業界ってところだね」

ツバメは思い返すように微笑んだ。

「私が生まれる前には一時期、有名になった人らしいよ。」

ホームページを見ると今はインディーズだったり「あるガールズバンド」

の講師をやってるみたいだよ」

確か、名前は…

音楽とトレーニングは無関係に見えて案外そうではない。

準備をするのに重い機材を運んだり、状況によってはステージを走り回ったりもする。

楽器自体の重さがあるのだ。

キーボード、ドラムのような据え置き、

ボーカルや笛ならともかくメジャーな楽器は大抵、力や体幹がものをいう。

そして肺活量や呼吸法も関係する。

ヒビキの休みの日課は20キロのランニングと公園での懸垂などだ。

彼女は早いペースで走り、今、雲梯で汗だくになりながら懸垂をしていた。

「49っ…！50っ…！」

雲梯から手を放し肩を切らして、呼吸を整える。

「今日のノルマっ、完了っ！」

伸びをして首にかけてたタオルで汗を拭く。

後は歩いて帰ろうとしたが…

ひっびっ、きいっ、ちやくくんっ♪

「っ、この声ハッ!？」

気づいたものの、ヒビキは背中に突貫してきた衝撃に倒れそうになる。

しかし、鍛えてるのか踏ん張って背中にいる人物に苦笑を浮かべ

る。

「久しぶりですネ？」

「というか、相変わらずですネ…唯さん」

「へっへっへっ…久々♪」

「またちよつと身長のびたあ…？」

髪は茶色のセミロングで、右の前髪を黄色のヘアピンで留めた女性

…

「いや少女を思わせる人物がヒビキに抱き着いている。

「唯さん、もう26なんだから…それに顔隠してくださいよ？」

「もう、そこそこ有名人なんですかラ」

「へっへっへっ、」

「ヒビキちゃんをみたら急に抱き着きたくなっちゃってさ」

「放課後ティータイムの平沢唯に抱き着かれて、」

「すっごい視線が刺さってるんですけど…」

「心なしか人が集まってきており、」

「唯に向けてスマホを翳していた。」

「やがてざわざわと声が聞こえる。」

「しかし、彼女の出す天性の空気がざわつきを納めていく。」

「こういうモノをこの人たちは持っている、」

「そう思い知らされ、久々の気分ヒビキは浸りそうになる。」

「あっはっは、」

「…じゃ、とりあえずちよつと皆と話さない？」

「先ほどの笑みのまま、唯はヒビキを見上げて尋ねる。」

「…あの話ですか？」

「うんっ！あずにゃんが久々に会いたがってるんだ…」

「今、丁度、私たちのアパートに来てるんだけどね♪」

「憂も一緒にね？」

「そうなんですカ？梓さんか…もうデビューして二年で…」

「唯さんたちは4年くらいでしたっけ？」

「そーだよっ！ぶいっ！」

唯はピースサインをしてニヤツと笑う。

「でもっ、先生が厳しいんだよねっ、

笑顔でマラソンさせられたし」

「ははっ、あの人も変わってないですネ」

「いや、ヒビキちゃんのお母さんじゃんっ!？」

他人事みたいに言ってるけどっ、「若いうちは何やっても死なない理論」の人の娘さんじゃん」

「私はそれが当たり前でしたシ…」

その言葉に唯はがっくしと項垂れた。

「まあ、そうなんだけどネ…」

それは置いといてさ、付き合ってくれる？

ヒビキちゃん？」

瞳を潤ませてうるうると見上げてくるOG。

ヒビキが入学するころにはいなかったが、

彼女の母校は唯と同じ桜が丘女子高等学校だった。

なぜ、彼女が唯たちと会うことになったのか…

それほど重要ではないが、それなりに明らかになるかも…しれない。

「そう言う言い方は卑怯ですヨ」

ヒビキと唯は走っていた。

それも結構な早さだ。

ヒビキはジャージ、唯は私服だったが走るのに適しているくらい軽装だった。

何故、走ってるのかという…。

少し離れた唯と憂の住むアパートに行くため…

というわけではない。

そこそこ有名になった唯は気配を感じ、

追跡者を撒くことにした。

恐らく、記者だろう。

「気づいてたんですネ」

「ヒビキちゃんもでしょ、

ううんヒツキーなら私より早く気づいてたよねえ」

走りながら、呼吸を乱すことなく併走する二人。

歩きながら世間話をするような気やすさで会話した。

両手を全力でふり、足を小刻みに上げて走っている。

しかし、呼吸は全く乱れず平常、

という奇妙なランスタイルが完成されていた。

「やはり有名になると色々な人が付きまとうんですネ？」

ある意味では良い事ですヨ？」

「でもお、私はヒツキーやあずにゃんの方に構いたいっ！」

唯のそこだけは譲れないという言葉にヒビキは笑みを零した。

変わってないな、いや大人っぽくなってると思う。

そのままちやんと大人になったんだ、と感じた。

「ヒツキーって…いや、もう今更構いませんけど」

「…それより、さ。もうそろそろ、家だから聞きたい事があるんだ」

柔らかな笑みを真剣な表情に変え、唯は尋ねる。

「私たち『放ティー』、それかあずにゃん、憂たち『若リブ』に入らな

いよ。」

唯はどこか願うようにヒビキにそう言った。

ヒビキはその言葉を聞いてとりあえず目線をそらし、彼女のアパートを見た。

「…話しましょうか、ゆっくりト」

「そうだねっ…あずにゃん、泣いて喜ぶよ。」

ビッキーが入ってくれたラ」

そう言う言い方は卑怯ですよ

ツバメは一宿一般の恩義として部屋の掃除をしていた。彼女自身、掃除はマメにするのか散らかってはいない。

唯、拭きが少し甘いと感じたのか、

洗面器と雑巾をもって彼女のデスクを拭く。

(こう言うところだけは、私は向いてるんだよねえ)

掃除や家事が嫌いではない自分。

しかし、それを生かさない道を選んだ。

母からすれば何をしてるのか分からないだろう。

昨日、自分が酔っ払ってヒビキに何を言ったか忘れてる。

しかし、紅葉も流れで飲んだのでそこで記憶が飛んでるらしい。

恐らく、ひふみを含めた三人が運んでくれたのだろう。

(月曜になったらちゃんと言本先輩にもお礼を言わないと…)

しかし、今、懸念して言うのは別だった。

ツバメはイーグルジャンプに来てから、桜ねねと対立した。

あの勤務態度や甘さに腹が立ったのは事実であり、

その心情が大半だった。

今はもう和解し、上手くはやっている。

しかし、彼女と働いてツバメは薄々気づいていた。

ねねは自分よりもプログラマーの才能が段違いにある。

自分が数年かけて做ったものを、

環境の良さを抜いても殆ど身に着けていた。

(ねねっちは感覚型の天才なんだろうなあ〜…)

自分に全く能力がない、なんて卑屈な事は思わない。

少なくとも専門学校生のなかでは自分も紅葉も最高レベルだ。

「でも、私たちよりも才能がある奴なんてやっぱりごろごろいるんだよね…」

一人ひとりに才能があっても、望む才能は私にはないんだ」

ぽつりとそんな言葉を零してはっとした。

紅葉が聞いたら怒りそうだ。

幸いなことに彼女は食べ物のカタログに夢中だった。

正直な話、いや当然の話。

ツバメは紅葉の絵を最上のモノと思っていた。

そしてそれは狭い見解というのもツバメ自身分かっている。

だが、涼風青葉の絵を見た時、

紅葉には言わなかったが紅葉よりも上手いと感じた。

感じてしまった。

彼女自身の努力もあるだろうが、

ぱつと惹かれる何かが青葉の絵にはあった。

そして改めてみると親友の絵が残酷な位、霞んで見えた。

描画力、技術にそれほど差がないのなら何が紅葉には足りないのだろうか。

そして私の何がねねっちに足りないんだろう？

(それが埋めがたい差異で、『差異能』って奴なんだろうなあ…)

少なくとも紅葉には言えない、

言いたくない悩みをツバメは抱えていた。

「……ヒビキちゃんに才能なんてない、よ」

「っ!? えっ!?」

いきなり背中に張り付いた声にツバメは驚いて振り向く。

すると郷里がそこに立っていて眠たげに目を擦っていた。

まるでさとりのように自分の心を読んだかのような言葉。

案外、そう言う洞察力が郷里という意味合いに相応しい。

「…郷里、ちゃん？…いや、さとつち…聞いてたの？」

あははと堅い笑いを浮かべてそう返す。

郷里は相変わらず無表情だ。

しかし、別に彼女に否定的な空気はない。

むしろツバメを見守るように見ている。

「…ヒビキちゃん、ううんっ、お姉ちゃんは凡人だよ。

少なくとも父さん、母さん、コウちゃんよりもずっとずっと」

ひよつとしたら、会社の中で一番ないよ

「ちよ…どういふことさっ？」

いきなりなんなのさっ…というか、お姉ちゃんデイス酷くないっ
!？」

いきなり郷里の姉デイスに気の毒になったのか、

ツツコミ気味にツバメは言った。

「事実、だもん…。」

お姉ちゃんにはミュージシャン…表で脚光を浴びる為の何かがないし、

お姉ちゃん自身…それも分かってる」

本人はいつもの無表情だ。

しかし、郷里の口調がツバメには冷たく重く淡々と感じる。

「なっ、なんでっ…」

何でそう言う事いうのさっ?!お姉ちゃんなんでしょっ!？」

世話に成ってる大好きなお姉ちゃんじゃないのっ!？」

郷里のあんまりな評価に思わず、彼女の肩を掴みツバメは睨む。

郷里はそれにも動じない。

「家族だから…お姉ちゃんの先生は母さん…」

母さんはお前に才能はないって言ってたから」

「つつ…い…なっ、なによっ!」

ナンなのっ!!それっ!!」

実の母親の冷徹かつ現実的な宣告をヒビキは受けていた。

ツバメは遠まわしに…ある意味ではねちっこく母からそう言われていた。

しかし、父は応援してくれた。

今、此処に入れるのは父の影響が大きい。

そうだ、ヒビキの父さんが応援してくれたんじゃないか？

しかし、そんな予想は郷里は裏切った。

「父さんも死んだ兄さんも…」

そんな姉さんに特に何をするともなかった。

そして…コウちゃんも」

「っ、なんでっ!？」

じゃあ、誰もヒビキンを応援してないのっ!？」

姉と慕っている八神コウすらそうだと妹の郷里は言った。

ツバメはその状況から、彼女は出来そこないと扱われているのか？

八神コウは本当は彼女を疎んでいるのではないか？と感じた。

しかし、郷里は少しだけ微笑んだ。

「そこから姉さんは、音楽に関して何でもやった。

大体の楽器を使えるようになった。

ステージを走り回る体力を身に付けた、

前座のトークを学んだ。

母さんは足りないのなら、補う努力をしなさいって」

客を楽しませるために寸劇をした。

寸劇をするために運動神経を鍛えた。

運動神経を活かすためにジャグリングをした。

「姉さんは一流のミュージシャンには成れないかもしれない、

でも、一流の人たちに目がとまるほどのエンターティナーになった。

私の大好きなお姉ちゃんは、才能なんかなくても渡り合える人だから」

その言葉を聞いてツバメの萎んでいた心の何かが燃える気がした。

「そっか、取り乱しちゃってごめんね。」

すごいんだね…ヒビキは」

掴みかかった彼女にゆっくり離れ、

笑顔を向けてツバメは謝った。

彼女が小さく微笑んだという事実もツバメは驚いた。

(そっか、信じてたから…見ていたんだ)

ツバメはいや、ツバメどころか紅葉達すら、

あの技量と運動神経は好きでやってると思っていた。

実際好きなのだろうがそれでも『一番なりたいモノ』に必要なスキルではないはずだ。

しかし、腐ることなく前向きにそれに取り組んだ結果、

今の彼女が培われたのだろう。

ツバメは改めて自分とは違う、と感じた。

(でも…私にはそんな情熱なんてあるのかな?)

「…昨日お姉ちゃんはツバメちゃんに言ってた事があるの…」

才能がないってツバメちゃんが言ってたから…

その言葉を教えてあげる、ね…。

ヒビキちゃんは言わないでって言ってたけど」

「?…なにになに?」

優しく励ましてくれたの?」

「ええっと、こういってた」

そんなに自分が弱っていたのか、と苦笑するツバメ。

そしてやっぱりヒビキに最近の悩みを吐き出していたようだ。

ツバメは「そんな事ない」って励ましてくれのか?

と思ったが。

いや、どう見てもネネちゃん天才ですよネ?

地味に郷理についてってますよネ。

ツバメさんはなんて言うか、普通ですシ

「ちよっと、酔って弱ってる私に容赦ないよねっ!?!」

弄るのは八神さんだけにしてよねっ!?!」

そうなのだ。

ねねは感覚で郷里の動きをよんでサポートしたり出来ていた。

ヒビキもそれを気付いたようだ。

慈悲のない言葉にややキレ気味に突っ込む。

関西出身のゆんがいれば、高評価を与えただろう。
ツツコミの才能がある、と。

本人は喜ばないだろうが…。

「まーまー…ツバメちゃん…このあとこのあと…」

「もうっ…」

無表情で抑えて押さえてとジエスチャーする。

今度は何言われても動揺しないでおこうとツバメは構える。

そして郷里は口を開いた。

ですが：私はどちらかというト、

ツバメさんの仕事の方が好きですヨ？

同情とか優しさ抜きにしテ

持たないのに持つ人と一緒にしている、

ってそれってやっぱ凄じやないですか。

それで足りない、納得しないって言うのなら…

私も手伝いますヨ：

一つの才で足りないのなら二つの才で挑みましょう。

一つの事で足りないのなら、二人で二つの事を倣いましょう。

私が貴女の才を補いますから、前を向いてください…。

何より、才能ない人が夢を見ちやいけないなんて悲しいじやないで
すか？

「って言ってたよ？」

ヒビキちゃん…」

「っ、なによっ、それっ…」

当たり前障りのない言葉なのにつ、ずっと来てっ…暖かいじゃんっ
もーっ、なんなのさっ、ヒビキんっ」

彼女が自分に言っていた言葉を聞いて、
ツバメから大粒の涙がこぼれた。

掌であふれる涙を何度も拭う。

そうだ、まだ自分はそれしか：一つの事しかやってない。
教わり真似る事は終わっても学ぶ事は終わらないじゃないか。

「私っ、やばいなー…」

ヒビキんが男なら好きになっちゃってたかも…」

涙を拭い、顔を真っ赤にしながらぼやく様にそう言った。

「お姉ちゃん、女子校で男装させられたよ？」

客寄せの為に」

「うっそっ!?!すごい見たいんだけどっ!!!?!」

ツバメは郷里にむかってさつきとは違う感じで詰め寄った。

「うん、見る? ツバメちゃん」

「みるみるーっ! あっ、ももも呼ぶねっ!」

そう言い彼女は親友の元に歩いて行った。

なら、私も友達の才能になろう。

それが私の新しい夢だから…!!

この時、鳴海ツバメの新しい夢が生まれた。

OG（オールド・ガール）02！

小奇麗な大きなアパートの三階。

その扉の前。

ここが彼女と憂の住むアパートの一室のようだ。

「もつといいところ住めるでしょう二、二人とモ」

「そうだけど、狭い方が人との距離を近くに感じれるしね」

ヒビキの疑問に唯は当然という風に返してノックをした。

「憂く、あずにゃんっ、帰ったよ」

とつとつとつと…

やや速足の足音が聞こえてきて向こうの扉の前で止まり、

かちやりと錠が下りる音がした。

扉が何うように開いて、ヒビキにとっては久しぶりの二つの顔が覗いた。

唯と同じ顔で腰まで伸びるほどの長髪の女性。

もう一人は黒髪のポニーテールをした女性だった。

唯と同じ顔の女性は平沢憂、黒髪の女性は中野梓だ。

「久しぶりね。九能さん。」

また身長伸びたのかな？」

「ヒビキちゃん、久しぶりだねっ」

自分に四年前に自分にかまってくれた二人を見つめ、

困ったようにヒビキは笑い、肩をすくめた。

「お久しぶりでス、活躍のほどは聞いてますヨ」

自分でも驚くほど堅くなった返事にヒビキは驚いた。

意識はしてなかったが、雲の上とまではいかなくても遠い人と思っていたのだろうか？

「ほらっ、ビッキーフ、カタいよっ！

前みたい先輩か、ちゃん付で読んでよ、ねっ！」

ぱしんと緊張した彼女の背中を叩き、唯は柔らかい笑みを向ける。

「はハ、そうですか…

そうですね、じゃ先輩たち、お邪魔します」

「うんっ、やっぱり九能さんは…ヒビキちゃんはそれでいいんだよ、それとちよつと屈んで？」

「？はいッ」

梓は笑みを浮かべ、ヒビキにそう言いヒビキは中腰になる。

すると、彼女の頭にぽんと暖かい掌が載せられる。

「お帰り、ヒビキちゃん…」

会いたかったよ？軽音部をちゃんとないでくれてありがとうね？」

「っ…はいっ」

優しい音色で梓はそういい、彼女の頭を撫でた。

身長が彼女を超えてから、ヒビキは余り彼女に撫でられることが無くなった。

久々の感触にヒビキに笑みがこぼれた。

「くすぐりたいですよ」

「ふふっ、もうちよつと撫でさせてよっ」

「あーずるいつ、じゃっ、憂っ、私たちは抱き着こうっ！」

そういうと唯はヒビキの屈んだ背中にひよいと飛び乗った。

負ぶさった感じだ。

ヒビキも何となく予想がついたのか、両腕で彼女の太ももとらえた。

「ちよつと、唯先輩っ！さすがにそれはズルいですよっ！」

「じゃ、私みたいにあずにゃんも抱き着けばいいんだよっ！」

ビツキーあつたかいし、すべすべでふかふかだしっ！」

「お姉ちゃん、梓ちゃん、

さすがにそろそろ部屋に入れてあげようよ」

憂は苦笑を浮かべてヒビキを見た。

ヒビキも同じように乾いた笑みをこぼした。

シャワールームにて。

唯は気にしてなかったが、ヒビキの体は汗だくだった。

流石にこの状態ではと思い、シャワーを借りようと思ったが先手を

打たれていた。

いい笑顔で梓から紙袋に入った着替えを渡され、浴室に通された。

(…久しぶりですネ、

唯さんたちのところで厄介になるのモ)

心地よく熱いシャワーが淀んだ汗を流していく。

こんなベタベタなのにあの人は良く抱き着けるものだ。

「だってビツキーの汗、なんかいい匂いなんだもん」

「変態ですか!?!」

そのやりとりも久々だ。

(ゆっくり、浴槽に浸かるのがベターなんでしょうけど…

今はカラスの行水にしときますか)

ボディソープを借り、頭と体を簡潔に洗い流した。

そして脱衣室に出ると、下着と服が用意されていた。

バスタオルで体を拭いてブラとショーツを身に着け、

服装のチョイスに苦笑する。

「パンツスタイルは正直、ありがたいですネ」

少し前にここに厄介になってたこともあり、

替えの服や下着には困っていない。

ラフな服装に着替えた後、ヒビキは三人のいる今に向かった。

テーブルを囲んでファアのついたカーペットの上に座る、唯、憂、梓。

人数は少ないが見慣れた光景だった。

「お風呂頂きました、いいお湯だったです」

「ははっ、いいんだよ?」

憂は自分の隣に座布団を置いて、ぽんぽんと叩く。

ヒビキはそれを見やって「失礼します」といい、座った。

「でっ、ビツキーの返事はどうなのっ!?!」

「いつ、いきなりだよっ、お姉ちゃんっ!?!」

「でも、正直、すぐに聞きたい話題ですからね」

唯の気持ちいいくらい遠慮のない声に憂は困惑し、

梓はしかし納得してヒビキを見つめていた。

「まあ、引き立て役くらいには利用できる実力はありますからね。

私ハ」

からかうようにヒビキは素晴らしい微笑む。

しかし、梓も唯もその一言にムツと睨む。

あの憂ですらじろつと彼女を見ていた。

怒ってる顔だった。

「もうっ、ビッキーはなんでそんなこと言うのっ!？」

「そうだよっ！私たちは貴女に才能がないなんて思わないっ!!」

いろんな楽器も弾けて、トークもできるっ！ヒビキちゃんは凄
いよっ！」

「私たちの何かが気に障ったなら謝るからそんなこと言わないでっ
！」

唯と憂の必死な呼びかけに梓の涙ぐんだ主張。

その言葉を聞いて気まずげに目を逸らすと、困ったように微笑む。

「すいません、ちよつと言ってみただけなんです。

そう思ってくれてることは素直にうれしいです、私自身モ」

ですが、同時にそれが理由で返事でもあるんです。

「わからないよっ、私たちは本当につ、

放ティーか若リブに来てほしいんだよっ!？」

「ヒビキちゃんが才能ないって思っても、

私たちは組みたいと思ってるの、それじゃ足りないの?。」

「それとも、そんなに私たちとやりたくない理由があるの?。」

「ここまで自分を買ってくれてることに嬉しさと後ろめたさを感じ
る。

正直な話、それも良いのかもしれない。

コウたちと別れ、彼女たちと奏でる日々も悪くはない。

己一人で輝けないのなら誰かと組めばいい。

それはいつも思ってることだ。

奏でるものとしては称賛を受けたいのも事実だ。

コウたちの夢も大事で絶対だが、華々しくデビューも悪くはない。

少なくとも、昨日までなら考える時間を貰っただろう。

唯たちも自分がこの業界に足を踏み込んだ理由を知っている。

その上で誘ってくれる事に在り難い。

そういう万感の思いを整理して口を開いた。

自分と約束した人物のことを。

「助けてくれって泣いてる女の子を放って置けますか？」

ヒビキは笑みを向けて三人の先輩に尋ねた。

意外な返しに唯たちは黙ってしまう。

「その子は、中学の時にプログラマーを目指して

専門学校に行って上京したみたいなんです。

実家は旅館で母親は女将さん、らしいです」

「うん……」

唯にはわからないが、どこか優し気に語るヒビキを見守る。

「その子の父親は応援したんですが、母親は反対しテ……」

内定を取れなかったら夢を諦メ、旅館を継げと言われたらしいで

ス」

「……」

梓はその人物の近況を静かに聞いている。

「結果、彼女は何とか内定を勝ち取って今に至ル……」

で終わればよかつたんでしようガ……」

その子は泣きそうな、いえ泣きながらこう言っていました」

私が内定を取っても母さんは喜んでくれないんだろうな、ト

「……うん」

梓はその子の環境を顧みて複雑な表情をゆがめた。

梓自身、ある意味では親のやっつてることを継いでいた。

だから、その子の状況に引掛かりを感じてしまうのだ。

夢を応援されないってどれだけしんどいんだろう、と。

「とは言っても、これは実際その子の予想なので分かりません。

しかし、その子の周りには妹を含めた才のある子がいました」

三人はヒビキの妹を知っているので、他の才ある子にわずかに驚いた。

「流石に郷里のようなことはできませんが、
感覚的に物を吸収して消化するのが得意な子です。

その子が数年かけたものを一年足らずで習得し、同じ土俵に立った
んです」

私はその子と約束しちゃったんです。

「…だから、行けません」

「そっか…なら、仕方ないかな?」

唯は苦笑を浮かべて座っているヒビキの頭に手を伸ばして撫でる。

「最も、その子は酔っぱらって覚えてないんでしようガ…」

あんだだけ飲んだってことは余程、だったんでしようねエ」

「ははっ、そうなんだ♪」

「それに…ナナセ…七瀬ってその子は言ってますタ。

自分がプログラマーになるきっかけを与えてくれた人だつテ」

「えっ、七瀬ってそれ…先生の苗字だよねっ?」

「はい、母の旧姓かつ今の芸名ですネ、恐らく関係してると思います」

「そっか、ならここでお別れ、なんだね」

憂は涙を浮かべてヒビキを見やった。

しかし、彼女は笑みを浮かべたまま首を振る。

「いエ、実はここに来るまで考えてたことがあるんです」

ヒビキは3人を真剣な表情で見つめた。

実は…今、作ってるゲームのOPとEDを頼みたいんです。

「それって!?!」

「この分野なら私も付き合っていけますから、

お願いできませんカ?」

「うんっ、でもいいの? 私たち高いよ?」

「…負けてくれるとありがたいです」

梓の意地悪そうな表情に苦笑交じりにヒビキは答えた。

「じよ、冗談だよっ!」

でもいいのっ? 勝手にそんなこと言っちゃってっ!」

「はいっ、一応、こっそりと企画の方にはそういう知り合いがいるト」

ヒビキはニヤツと笑って笑みを浮かべた。

3人は観念したように笑った。

彼の母親が言っていたことを思い出したのだ。

才能ある人間の感性に必要な人間は、

それを正當に評価して繋いでくれる少数の凡人だと。

どんなに独創的なものを才あるものが作ったとしても…

大多数の普通の人間の目には止まらない。

ホームズの隣にいたワトソンのような人物…

そういった才を認め受け入れ、ついてきてくれる人がいるからこそ輝けると。

娘はあなた達ほど称賛される腕も才もありません。

しかし、あなた達が称賛する凡人にはなれると信じてます。

ヒビキが人の夢を守る子に育ってくれたのは、

私の誇りです。

目の前の後輩はそういう稀有な凡人だった。

「分かったよ。」

ヒビキちゃん、で、貴女のことだからもう作詞も楽譜もあるんでしょ？」

梓は観念したように微笑んで、かつての後輩に尋ねた。

「はいッ、OPタイトルは『STEP by STEP UP』、ED

は『ユメイロコンパス』です。」

でっ、ボーカルはこっちで用意します」

「ヒビキちゃんのことだから、普通に歌手を使わなそうだよね」

憂はどこか探るように微笑んで、彼女の肩を叩いた。

「ちよつと奇を銜いたいんですヨ…そうですねエ…いっそのこと」

ヒビキはにやりと意地の悪い笑みを浮かべて、

キャラ班とツバメとネネをを思い浮かべた。

「ただいま、でス」

「あーっ、お帰り〜っ、ヒビキ」

ヒビキはあの後、会話を交わして唯たちと別れた。戻った彼女の視界にはエプロンを付けたツバメがこちらに向かってくるのが見えた。

「どこの主婦なのかナ？」

「萌えてもいいだぞい？ヒビキン」

「ゴメン、意味わかんない」

持つてきていたお玉を突き付け不敵に笑うツバメ。

笑みを固めたまま突っ込むヒビキ。

すると後ろの方からぶーぶーと不満げな郷里、

紅葉の声が聞こえてくる。

「なるー…もう、6時だよー…食べようよー」

「うん、お姉ちゃんのこととは置いといて…うん、許してくれるから…だから放って置いて食べよう、ね？」

「紅葉ちゃんって意外とスボラなの？」

「さとりんって意外とヒビキに容赦ない？」

お互いの相棒の意外な一面を知って互いに苦笑を零す二人。

「仕方ないですネ。じゃ、行きましようカ、ツバメ」

「うんっ、じゃ行こうかヒビキン」

その言葉にツバメは背を向けてリビングに向かおうとするが、ヒビキは右手を突き出しタ。

「？」

「…取り合えず、やるだけやって今は頑張ろう？」

私はついていくから…サ」

優しい笑みを浮かべてヒビキはそういう。

ツバメはその言葉に詰まりそうに鳴りながらも嬉しそうに微笑み、その手を取った。

「うん、よろしくね。これからもずっと」
ツバメは素晴らしいヒビキの手を握りしめた。

「休日、は…ゆっくり、休みたいっ、です、からね？」

「そう言えば聞きたかったんですが…」

メイド服を着たヒビキがキーボードを叩きながら、ツバメの横でプログラムを打ち込んでいる。

サウンドプログラムを組み立てているようだ。

最も少々詰まっております、ツバメにフォローしてもらっている。

しかし、ある程度は形に成ってきた。

だから、今のうちに聞いておきたい事を聞こうと思った。

ちよつと余裕が出来たから聞きたい事を聞くとする。

丁度、うみこさんにハンギングツリーをされてるしずくさんもある。

聞くにはいいタイミングだと思った。

だからこそ→の台詞を放っていた。

ヒビキの台詞にうみこ、ツバメ、ねね、

そして吊られたしずくは疑問符を浮かべた。

「個人的な疑問ですけど、何で男性社員と合同で仕事しないんですか？」

たまに男の人が存在してないように感じるんですけど」

その言葉にしずくはぴしつと固まり、

ツバメとねねも「あー」という表情で納得したようにヒビキを見た。

うみこはしずくを見た後、溜息を吐いて彼女を降ろして離れた。

キャラハンメンバーと妹の郷里も興味を感じたのか、聞き耳を立てていた。

青葉は一応、遠山さんの件とは聞いた。

だが、彼女も流石にそれを信じたわけではない。

「それを聞いちゃうかい？ヒビキくん？」

というより、ハンギングツリーされた私にノーリアクションでそれを聞くのかい」

若干、堅い表情で笑ってしずくは言った。

「すいません、何か見慣れてしまっテ…」

「ヒビキさんは悪くありませんよ。」

私に怒られる事を毎日する葉月ディレクターに問題があるんです」
「おやおや、うみこくんは手厳しいねえ。」

まあ、でもそうだね…

涼風君たちも興味深げらしいし、休憩がてらにはなすとするかな」
(一応、ちゃんとした理由はあつたんですね)

青葉はその言葉を聞いて苦笑を零すしかなかった。

そして興味深げにキャラハンメンバーに郷理を加えたメンツ、
プログラム班にヒビキを加えたメンバーで机と椅子を持ちより、
しずくは話をすることにした。

机にはゆんとひふみが持つてきたお菓子を乗せて…

「結論から言うと、面接の段階で男性社員は無条件で花ちゃんの方に
通してるのさ」

「そうなんですか？それは何ですか？」

青葉は前から思っていた疑問を素直に尋ねる。

「んー…ふざけた理由でいうなら私は可愛い女の子採用担当、
花ちゃんはその逆というところかな」

その返答にうみこは呆れてため息を吐く。

「しかし、それは表面上は…でしよう？」

あなたと花さんはいい加減です、が、意味のない事はしません」

「ふふっ、うみこくんに信頼されてるのは意外だけど嬉しいねっ、
おおっと、デコピンの構えはやめてくれよ。」

ここからだよ」

唯、しずくはどこか複雑そうな溜息を吐いた。

「唯ねえ、コレは私と花ちゃんの偏見が入るからねえ。」

聞き様によつては不快かもしれないけど…良いかな？」

「？失礼な理由ってことですか？」

「まあ、ある意味ではねえ…」

「うーん、そないなこと言われたら益々気に成りますよお」

ヒビキとゆんはその言葉に更に興味がわいた。

周りもそうだろう。

「今まで暈してはいたけどいい頃合いだし…」

ヒビキくんや涼風くん、鳴海くん、うみこくんはともかく、滝本君たちは知った方がいいだろうしね」

名前を呼ばれた四人は互いを見合わせ、首をかしげた。

「ぶつちやけたことを言うと、

この業種のデザイナーやプログラマーってコミュニケーション、つまり…コミュ力が低い奴が男女ともに多い」

身も蓋もない言葉だった。

ゆん、ひふみ、紅葉は固まる。

しかし、はじめとねねは心外という風に突っかかる。

「ちよ、ちよつと待って下さいよっ！」

私、結構明るいですよっ！元気ですよっ！！」

「わっ、私だって元気ですよっ、友達だって…」

しかし、無情にも同僚から出た言葉は非常だった。

「いや、はじめ…隠れオタクやん…」

その時点で十分暗いやん、間違いなくこっち側やで」

「ねねっちは誤解されるから、

絶対コミュニケーションは上手くないと思う」

ゆんと青葉は納得したように言う。

青葉の言葉にツバメも「あー」としか返せない。

はじめはゆんの厳しい言葉に石化した。

「あおっちもなるっちも酷いっ！」

大体っ、なんでうみこさんはOKなんですか」

「私はサバゲーで様々な世代の男女と関わってますから…」

交友関係は広いですよ」

「私は旅館の仕事をやってたから接客は得意です」

「んー…私は普通と思うんですけど、

遠山さんからは結構褒められてますね、そこら辺」

「えっト、バンドで色々とお人脈が…」

うみこ、ツバメ、青葉、ヒビキの四人がそれぞれ説明する。
その主張に低コミュニケーションのメンツはうっと詰まる。

「まあ、そこら辺は花ちゃんのものも変わらないからね…。
それにこの会社だけなの知らないが…」

男も女も異性に免疫が無さすぎるのが多いんだ」

しずくは苦笑を浮かべて続ける。

「ぶっちゃけ、混ぜると業務が滞る可能性があるんだよ」

その言葉に一同は納得するしかなかった。

「まあ、それでも私が新米の頃は普通に共学のノリだったんだけどね」
しずくは思い返すように目を閉じた。

「そうだったんですか？」

紅葉は信じられないという感じで尋ねる。

「唯、この業界に入ってデートをする時間なんてないんだよね。」

もう皆は知ってると思ってるけど、泊まりも普通にあるし」

「休日、は…ゆっくり、休みたいっ、です、からね？」

ひふみは納得して噛みしめるように言う。

確かにせつかくの休みにデートなんて面倒だ、と思った。

「それで別れて男と女で派閥が出来てしまっただけ、

そこから男女別は暗黙の了解に成ったのさ。」

いやー…あのドロドロは昼ドラのようだったよ」

思い出してきたのはしずくは遠い目で笑った。

しずくのそんな疲れた様子を見て、流石にうみこも心配になった。

「あつ、あの…葉月さん。」

大丈夫ですか？」

「ああ…で、その話の続きなんだけどね。」

一応、私は状況によつては男を入れるつもりもあるし花ちゃんもそ
うさ。

唯、条件がいくつかあって…」

既に彼氏や彼女がいること。

或いは既婚者に限る。

「といった具合だよ。」

この業界ほど職場結婚に向いてない場所もないからねえ…
既に相手がいる人じゃないと任せられないんだよね」

「どこの会社もそうの気がしますけど…」
はじめは何うように尋ねる。

「実は面接をした中に私たちの会社に美人が多いと言った奴がいたらしくてね。」

フェイスブックか、ツイッターでさ。

結構、君たちを目当てに来るやつも多いんだ」

「あつ、ありやく…だから、なんですねえ」

「だから、人材は募集してるけど相手がない、

未婚者は基本混ざる事はないようにはしてるのさ」

少なくともイーグルジャンプで未婚、

独り身の男は女性ブースにはこれないとハッキリ言っておくよ。

青葉に疲れたような笑みで応え、しずくはそう締めくくった。

「とはいっても、分断するにもデメリットはあるからねえ。」

いちいち男性側フロア、ブースに移動するのも面倒だしねえ」

正直なところ、男に慣れてないと後々苦労するのは分かってる。

その為、しずくはどうするかと頭をひねる。

常に女性としか関わらない訳ではないのだから、

青葉、ツバメ、うみこ、ヒビキはともかく他は危ういのは間違いのないのだ。

「いっそのこと、お試しでやってみてもいいけど…」

男連中、結構ギラついてる気配がするから余り関わらせたくないんだよね」

「あー…だったらつ、ちょっと提案があるんですけどっ！」

ツバメは手を上げてにやりと笑った。

意外な人物の言葉に一同は驚いたが、ツバメは続ける。

そしてヒビキの肩をポンと叩いた。

「じゃ、ヒビキんに任せてみたらどうでしょう!？」

「…へッ…?」

ツバメの言葉にヒビキは固まり止まってしまう。

一同は困惑したが、紅葉だけは知ってるのか「あー」とほほ笑んだ。「ヒビキくんは？なぜだい？」

「実はヒビキ、女子高の時、男装でバンドして女の子から結構告白されたりしいんですよっ！」

「ぶっ!!げほッ、ごほッ!!」

その言葉に一同は湧いた。

そしてヒビキはむせた。

「えっ、それホントなのっ?!?どんな感じなのっ?!」

「随分、きつ、禁断の関係やなっ…先輩に教えてっ」

顔を真っ赤にしてはじめてゆんはずいっと詰め寄りながら聞く。

「おおっ、ヒビキんの意外な特技だねっ!あおっち」

「ヒビキちゃん、凄いつ、私もその話、凄い興味あるっ!!」

「ヒビキさんはその…女性に興味があるのですか？」

「いやっ、ないですよヨ!?客寄せの為ですからネ!」

興奮と好奇心の嵐の渦中に放り込まれたヒビキ。

彼女はツバメを恨めしげに見やった。

「ごめんごめんって、でも…ヒビキって男っぽく振舞えるから告白されたんじゃない？」

「だったら、活かした方がいいんじゃないかな？」

「いや、理屈は分かるけどサ。」

このタイミングで暴露しないでくれ…

って何で知ってるのサ」

「…お姉ちゃん、ぶい」

無表情でどこか得意げに郷里はピースした。

「こんな妹を可愛いと思ってる私が憎イ…」

そういい、がつくしとヒビキは項垂れた。

しずくもどこか気の毒そうな笑みを浮かべていた。

「まー…でも、確かにソレで馴らした方がいいかもしれないね。

滝本君たちは…」

しずくはヒビキの肩をポンと叩いて、清々しい笑みで言った。

「ヒビキくん、経費は私が掛け合うからその当時のように振舞ってほしい」

「既に嫌な予感がするんですが…それって要ハ…」

しずくはものすごく良い笑顔で…

「明日から、男装してきてくれ。」

郷理くんにちよつと頑張ってもらおうとして、

仕事終わりに滝本くんたちとデートをして貰う」

「ですよネー…」

そこには男性との交友を円滑にするために男装を命じられた、訳のわからない女性社員の姿が合った。

「いつ、意地悪な青葉ちゃんが出てきたんだっ、ヒビキちゃんっ、には悪いけど逃げないとっ…!!」

桜ねねは走っていた。

有体に言えば寝坊をしてしまい、会社までの道を全速力で走っていた。

(あくっ！やばいやばいやばいよっ！)

うみこさんっ、カンカンってよりギラギラだよっ!!)

昨日の段階で急用のプログラム作業が入り、時間厳守を言い渡された次の日。

つまり今日だ。

開始しよっぱな遅刻は流石にまずいし、怒った彼女は何より怖い。全速力で走るも青葉の次に運動神経も体力もない。

そんな彼女は駅から30メートル走ったところで肩で大きく息を切らしてしまう。

「ぜえーっ、はあっ、ぜえーっ、

あうくくっ、これじゃ間に合わないよおくく…」

「あれ、ねねさんじゃないですか?」

低い声が低い彼女に背から降りかかり、ねねは振り返る。するとそこには…

目を見張るほどの端正な顔の青年がいた。

黒髪だが、陽の光を受けて『緑の黒髪』を体現している。

服は公立の学生服を着ており、

肩にはナイロン製の学生かばんをたすき掛けていた。

「え…あのっ…誰ですか?」

端正な青年の顔つきに見惚れながらも、

ねねは警戒の色をあらわに尋ねる。

青年はわずかに驚いたものの、納得し口元に手を当てて含むように笑った。

「うみこさんに面接を申し込んだものですよ。」

貴女のごことは聞いてます。これからよろしくお願いします」

「えっ!? ああ… そうなんだっ (だったら怪しい人じゃない、かな)」
「つと、それより… このままだと遅刻ですね。

ねねさん、ちよつと失礼しますっ!」

「つ、ええええ!? ちよ、ちよつとつ…」

ヒビキはひよいと器用にねねを抱きしめて持ち上げた。

いわゆるお姫様だっこの体制である。

「この方が早いでっ、行きますよっ!」

「ちよつ、ああああっ!!」

ねねの制止も無視して青年は駆け出した。

びつくりして青年の懐をぎゅとつかんでしまう。

いや、それよりも…

(ううう… 恥ずかしいよお…)

興味深げな視線が突き刺さるのを感じ、

ねねは彼の懐に顔を埋めた。

そして、二人は割と早くに会社前についた。

青年はねねを下して一息ついた。

「ふい… 何とか間に合いましたね」

「うっ、うんっ…!」

ねねは顔を真っ赤にしてそういった。

青年は特に答えることもなく、中に入る。

「あつ、社員証はもってんの!?!」

「… ああ。一応、頂いてます」

若干、思索してから確認するように青年は言った。

ねねはその間を疑問に思ったが、それよりも入社を優先した。

「ありがとねっ!

お兄さんのおかげで助かったよっ!

これでうみこさんに怒られずに済むう〜」

「桜さん… 私が何ですか?」

「つ、ひいひいっ!!?」

いきなり背中に渦中の人物が現れた。

その事にねねは仰け反るように飛びあがる。

「大袈裟ですね。」

しかし、その調子だときりぎりだったようですね。

間に合ったのでこれ以上は何も言いませんが…」

うみこは呆れたように溜息を吐く。

そして隣にいる青年を見て溜息を吐いた。

「しかし、貴女も災難ですね。」

葉月ディレクターの提案とはいえ、そうなってしまおうとは

うみこは一瞬、青年を見た後苦笑気味に青年を見た。

「ははっ、まあ、俺で慣らそうということでしょうね」

「しかし、見事ですね。発音も音色も違います…」

変装の域ですね。これは」

うみこは感心したように青年の体を見回した。

ねねはうみこのその様子に違和感を覚えた。

何というか顔見知りというか、結構前からあつてる雰囲気だ。

しずくの名前が出たことから、青年はこの会社の人たちと関わりが

あるのだろう。

「あつ、あの…うみこさんっ、

えっと、この人知ってるんですか？」

「私だけじゃなく、皆さんも知ってますよ」

困惑するねねの様子が面白いのかふっと微笑むうみこ。

「そうですね。じゃあ、自己紹介を頼めますか？」

うみこは青年に向き合って笑みを浮かべていった。

彼女には珍しい、どこか悪戯したような子供のような笑みだった。

「はい、私の名前は九能ヒビキです。」

今日からよろしくお願ひします」

「ええええええええつええええええええ!!!?」

ねねの驚愕の絶叫が響き渡った。

キャラハン、プログラマブース

「ほえ〜〜っ」

「おお〜〜…」

「すごいっ、イケメンじゃんっ！」

「(こくこく)」

「やっぱ、写真よりかっこよくなってんじゃん♪」

「私が今まで見た男この人よりもイケメンかもしれないね」

上から青葉、ゆん、はじめ、ひふみ、

そしてツバメ、紅葉のリアクションだ。

当のヒビキは好奇の目に居心地の悪さを感じ、

頬をポリポリ書いた。

「あんまり嬉しくないですヨ？」

それは正直…」

「ヒビキちゃん…ううん、ヒビキ君、どんまい」

事の発端の妹は我関せずという風にぼそっとつぶやいた。

「誰のせいだっ!!誰ノっ！」

ヒビキは常備していたのか、懐から瞬間的にハリセンを取り出し、

妹の頭を小気味よくぱしんと叩いた。

「あう！」

無表情で軽く仰け反る。

音は響いたが、それほど痛くないようだ。

「ハリセンで突っ込む人を間近で初めて見たわあ〜」

ゆんは感心したようにハリセンを操るヒビキを見やり、

そんな感想を零した。

「いやいや、そんなしみじみ言われてもね。

しかし、ヒビキちゃんは学生服なのは何でなの？」

「舞台衣装ならあるんですけど、今、

男物であるのがこれしかなかったんですヨ…

高校の時に来ていたのをまた着るなんて」

遠い目をしてヒビキは天井を見る。

それはそうだと一同は納得した。

「じゃっ、終業後に時間があつたらヒビキんの服っ、皆で見立てようっー!」

「ねねちゃんっ?!」

「いいねっ!!それ、私ねねっちの意見に賛成っ!!」

ねねは思いきり手を挙げてそんな提案をした。

ツバメはそれに乗っかかり皆に微笑む。

「せやなあゝそれ面白そうやん♪」

葉月さんに連絡入れんとなあゝ」

「ヒビキちゃん、ちゃん付けで読んでますから参加していいですよね?」

「私も…参加、したい、かな?」

ゆん、紅葉、ひふみも笑みを浮かべてそういった。

冷や汗を垂らしてヒビキは青葉とうみこに救いを求めるように見やる。

着てきた自分もどうかと思うが、上司命令で不可抗力だ。

そもそも、仕事はするが基本もうメイドで手一杯なんだから放つて置いて、

というのが心情だった。

「…この中で過半数、決まっていますしもう覆ることはない、かと…」

それに少し、悪いとは思いますが私も興味があります」

気まづげにヒビキから視線を逸らしてうみこは答える。

「ヒビキは一縷の望みをかけて青葉に振り向く…が。」

青葉の頭から某バイ菌男のような触角、背中から蝙蝠の羽が生えて
いる…

そんな姿を幻視した。

心なしか服装も黒いキャミソールを纏っており、変な色気を醸して
るような…

姿も幻視した。

「ふっふっふっ…ヒビキいん?」

残念だけど、先輩権限で君に拒否権はないのだよっ、
存分に私たちのために頑張ってくれたまえ」

(あつ、いつ、いじわるな青葉ちゃんだあ…)

(えつ、青葉ちゃん、こんなキャラだったの力!?確かにイニシャルがSになるけど!?)

ダブルサディスト青葉ちゃん!?)

「ふつふくん…ヒビキンっ、何か失礼なことを考えたのかなあ〜」

「うっ、いやいや…何度もないですよオ…先輩っ!?!」

座って冷や汗をかいてるヒビキの前に、椅子から立ち上がり座る青葉。

うっすら加虐的な笑みを浮かべて、彼女の顎をくいっと持ち上げる。

(えっ、これなにコレ…どういふ状況なん?コレ)

困惑するヒビキの耳元で青葉はそつと囁く。

「ヒビキちゃんの見せてない部分っ、いっぱい見せてくださいあい…」

私たちがたっぷりと、じつくりと見てあげますから…ね」

「つつっ…!?!」

耳元でそう囁かれたヒビキの背骨から電流が走る。

ぞくぞくするような不快でいて、気持ちよさを感じる律動だった。

その二人の様子を見て、全員が顔を真っ赤にしていた。

「ちよ、ちよつとつ、青葉ちゃんのキャラが変わってんだけど!?!」

あんなキャラだっけ!?!」

「知らんわっ!?!なんなん、あのアドルティな会話っ!?!」

「いつ、意地悪な青葉ちゃんが出てきたんだっ…」

ヒビキちゃんっ、には悪いけど逃げないとっ…!?!」

「青葉さん…私も…負けませんねっ…」

今度は私がヒビキさんを…っ!!」

「ももっ!?!違うからっ、目指す方向そっちじゃなくていいからっ!?!」

(でもっ、ヒビキと二人でいるときに参考にさせてもらおうかなっ
♪)」

「あつ、あおつちの秘められた攻撃性が出てきたあ(がくがく)」

「あのっ、精神尋問はサブゲーの駆け引きに使えますね。

私も桜さんに試してみましよう」

「やらなくていいですよ!?!」

「…お姉ちゃん、何かいいね(´・ω・｀)」

今の青葉とヒビキにとって周りのやりとりは目に入らないのか、

二、三そのやりとりを二人がした後、

冷静になったヒビキは落ち込んで帰ろうとしたのは言うまでもなかった。

無論、青葉が必死で止めたのは想像に難くない。

「おおく…年下の先輩に調教される年上の後輩もいいねえ」

鼻血を出しながらスマホでカメラをぱしぱしと二人の様子をしばらくは撮っていた。

余談だが、二人の写真は額にとって飾ったそうなの。